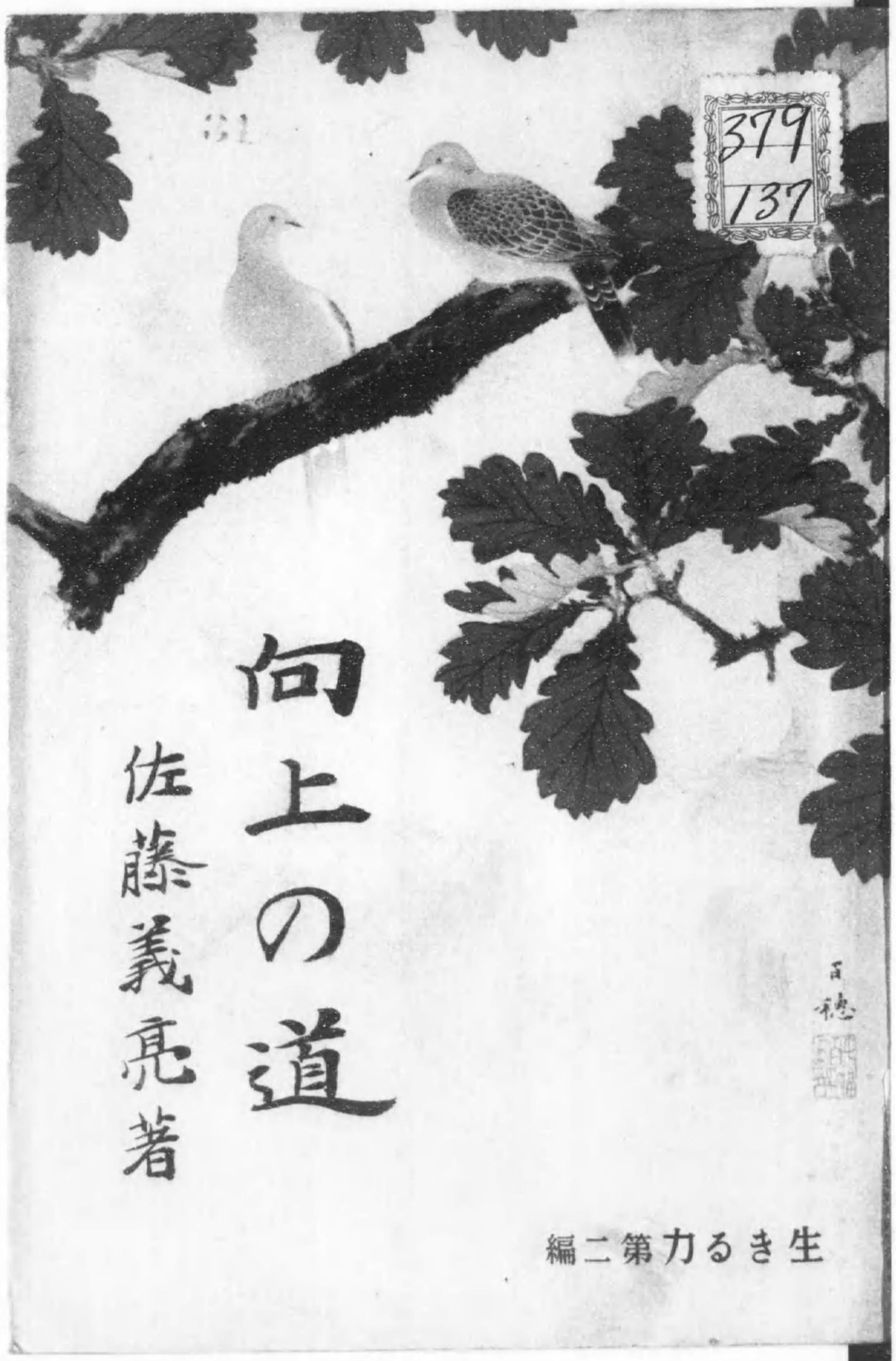


向上の道

佐藤義亮著

生き る力第二編

379
137

始

特217
489

向上の道

生きる力
第二編

佐藤義亮著

はしがき

人は日毎に、一行でもいゝから修養の書を讀み、一句でもいゝから修養についての話を交すべきだと思ひます。求める心のある人には、その一行一句が胸に強い響きを與へて、反省させられることが實に多いのであります。

私が毎月、雜誌『日の出』に、「日の出の言葉」といふものを連載して七年になりますが、それは、多數の讀者の方々と、修養に關する話をまじへ、自分もそれによつて深く考へさせてもらふ爲めであります。一昨年五月、その中から二十餘篇を拔いて『生きる力』一卷を公にしました。今その第二編としてこの小著を世におくり、多くの人たちに讀んでもらふことゝなつたのは、眞にこの上もない喜びであり、心から有難いと思つてゐます。

何ぶん淺い智見と狹い經驗とから割りだしたもので……云々と私は前著の序文中に書きましたが、本書においても同じ言葉を繰りかへさなければなりません。たゞ私の長い生涯は、「働き」の連續であります。一日だも休むことなく、常に希望に鞭まされながら、營々として働いて來ま

した。人は自ら鍛へ自ら修めて、ひたむきに働く可きものである――、これを本書の至るところに述べましたが、そこから向上の道の拓けて行くことを、私は、信念として申しあげたいのであります。

私はかうしてこの小著を編したのですが、もし、非常時に於ける國民の心構へに就いても、聊かの參考となりますなら、本懷これに過ぎない次第であります。

○

表紙の繪は、鄕友故平福百穗畫伯が、昭和五年春、渡歐の途に就く直前、特に私のために揮毫してくれた大作の縮寫です。私が本を出す事があつたら、是非表紙を描くと言つてくれた同君の言葉を思ひだし、私にとつて懷かしい記念となつたこの繪を表紙に用ゐました。地下の靈も喜んでくれるだらうと信じます。

昭和十三年一月二十三日

佐藤義亮

目次

光明と暗黑は背中合せ……二
道標の文字――、心中は一度だけ――、生きた「奮鬪成功物語」――、
闇黑のドン底から――

○

飛躍の機會を逃すな……一五
團菊の『國姓爺』――、羽左衛門の妙技――、機會は氣が短かい――、
新世界へ飛躍の資格――

○

人はなぜ貧乏するか(上)……二六
資本金二圓五十錢――、成功祕傳八ケ條――、貧乏を苦にするな――、
貧乏神の棲み家――、私の體驗から――

○

人はなぜ貧乏するか(下)……三九
福運傳授の看板・夫婦の和合――、短氣は損氣――、たゞ努力一つ――、
金の生る木・貧乏神退散――

○
最後の最後まで頑張れ……五二
梯子乘りへの警告――、喜び過ぎてはならぬ――、隱居生活と恩給生活――、奉天役最後の頑張り――

○
世の一切は心の鏡……六五
地震を恐れぬ治兵衛――、青砥藤綱と心の影法師――、「社風」といふもの――、心を急回轉せよ――

○
あらゆる物から教へられる……七八
部長のカナリヤ買ひ――、相手に教へられる――、松の葉にそゝぐ雨の音――、發明はまごゝろの賜――

○
平生の用意と緊張……九一
常陸山の鼻柱――、菊五郎の舞臺裝置――、生活全部のつながり――、謂ゆる名人氣質――

○
己れを誇り飾る心……一〇三
神風號と荒鷲隊の勇士――、「天を相手にせよ」――、廣田外相の逸話――、掛値のない正味の自分――、ある會社の重役との問答

○
嫌ひな仕事が好きになる……一二六
裁縫ぎらひの娘さん――、食べ物の好き嫌ひ――、太刀山と吉右衛門――、仕事を好きになれ――

○
癇癪の蟲を封じる……一三〇
怒つて黑星――、癇癪は人を殺す――、婦人の癇癪――、腹の蟲封じのお呪ひ――、退一歩の工夫――

○
小事に油斷するな……一四五
吸殼入りの小箱――、最後の一瞬の緊張――、「二一天作の五」――、一本の活字と一粒の豆――

○
今日の事は今日爲せよ……一五六
花の梅澤旅團の話――、思ひ立つたが吉日――、大晦日の加增――、石の下の寶もの――
○
取越し苦勞に囚はれるな……一六七
揚子江沿岸の泥水――、食堂の中毒騷ぎ――、厭な暗示は撥ね返せ――、勝つ勝つと思へば勝つ――、身邊樣々の取越し苦勞――
○
上下己れを捧げて働く……一八一
機械力よりは人間力――、一切が自分の仕事だ――、月給に使はれるな
○
與へられた處を喜ぶ……一九一
南洋から戻つて來た青年――、處に應じて氣持をかへる――、職業少年の危險期――、反省させられる例話――

○
職業に信念を持て……二〇三
角力とりと追剝――、本當の修養は働きの中から――、賣れる店と賣れない店――、會社の重役も役所の給仕も――
○
嘘から出た誠の話……二一五
わが國民道德の根源――、親の脚を洗つた話――、まづ眞似から入る――、親と一つ心になる――
○
子供の生活を理解せよ……二二七
子供も樹木も同じこと――、一切を抱擁する愛――、兄と弟の順序――、金の鳥居と子供の約束――
○
國家と運命を共にする……二四〇
日本海々戰當時の一挿話――、ある小學校での話――、法に遵ふ精神

向上の道

—生きる力・第二編—

佐藤義亮著

細木原青起氏挿畫

光明と闇黒は背中合せ

◇道標の文字

秋もなかばを過ぎた夕暮れの田舎道を、一人の青年がとぼ〳〵と歩いてゐます、梢をわたる風にから〳〵と舞ふ落葉の音も、身にしみるやうな寂しさでした。

やがて道は二筋にわかれたところに來ると、大きな銀杏の下に古びた一本の道標が立つてゐます。近づいて見ると、

右　くらし
左　つらし

と、二行に書いてありました。

その青年は、東京でも大阪でも失敗した果に、知邊をたよつて漸く岡山まで來た

のですが、右は闇く、左は辛しといふ道標の文字は、まさしく自分の運命を表示したものだと思ひ込み、闇黒の天地と苦悩の世界とが左右に待ち構へてゐるといふなら、何處へ行つても光明を見出せる筈がないと、すつかり希望を失つて、たゞ悄然と立つてゐました。そこへ白髯ながく垂れた坊さんが通りかゝつたので、青年は急いでその前に跪き、

「この道標を見て下さい、私はどうすればよいのでせうか。」

と、その惱みを訴へますと、

「あんたは何か勘違ひをしてゐるのではないかね、その下の落葉を拂ひのけて見るがよい。」と言つてそのまゝ過ぎ去りました。

青年は、急いで道標の下をうづめてゐる落葉をかきわけて見ますと、右の下に「**き**」、左の下に「**ま**」といふ假名があらはれました。つゞけて讀むと、「くらしき」と「つらしま」であります。卽ち、右へ行けば、紡績で名高い倉敷町であり、左は連島町へ行けるといふことが分つたので、青年はやつと安堵の胸を撫でゝ、その志

す方向へ急いだといふのであります。

×　×　×

この短い話のなかに、世の中をわたつて行く上に於いて深く敎へられるものがあります。

私たちは、物を見るに、とかく皮相に流れやすく、わづかに眼の前に現はれた部分を以て、その物の全部であると決め込んでしまひたがります。空が眞黒にくもつて日の光りが見えなくても、まさか太陽が消えて無くなつたとおもふ人はありますまいが、自分の生活の上になると、一寸したことで希望の太陽を見失ひ、立ちあがる氣力をなくしてしまふ場合が多いのであります。

この話のなかの青年は、道標を見た刹那、暗澹たる自分の運命を示したものと早呑み込みしたのですが、何ぞはからん、それは旅人のために行先を敎へてくれるものだつたのです。その道標の下の落葉をかきわけるといふ、一擧手一投足の勞を惜しんだばかりに、よし一時なりとも、自分から悲觀の淵に陷るなぞは、愚かなこと

と言はなければなりません。

しかし、この青年を一概に笑へないことは、人生の行く手に横たはるさま〳〵の苦痛に出會ふと、打ちのめされてしまふ人が實に多いからであります。

學校の試驗に失敗する、就職の見込みは立たない、商賣は不振だ、借金がふえる、家庭は

うまく行かない、會社勤めは面白くない、――などゝ人は何かしら惱みを背負はされてゐるのですが、大抵はその惱みにうち克つ見込がないと匙を投げて、自分の人生は闇黒そのものだと諦めたがるのであります。

元來、光明と闇黒とは背中合せ、紙一重の差に過ぎないのであります。闇黒のなかにゐても、一足ウンとふんばれば、光明の世界に突き出られるのに、その紙一重のところで躓いてしまふのは、役にも立たない諦めのために外なりません。

この人生に諦めなどゝいふものがあつてはならない筈です。もう駄目だ！　さう思ふからこそ駄目になるのであつて、自ら墓穴に入るやうな、そんな心のもち方を捨てゝ、たゞ元氣に働くべきであります。毎日々々を努力一つで押し通し、どんな時にも目的に向つて進む足を停めてはなりません。前の話の青年も、諦めから一歩拔け出たとき、落葉の下に輝く光明を見出したのであります。

◇心中は一度だけ

自殺や心中の記事は、毎日の新聞面から消えたことはありません。さういふ人たちは、この廣い世のなかに、自分の身の置きどころがないものと觀念し、惱みぬき苦しみぬいた末に、おもひきつたことをするのですが、そのなかには、死に切れないでゐるところを助けられたとか、三原山に投身したが、口元の岩にひつかゝつたので這ひあがつて助かつたとか、いろ〳〵の狀態で、この世に呼び戻された人がずゐぶん多いのであります。

しかし、さういふ人たちが、二度と自殺や心中をしたといふ話を聞いたことはありません。この世に絶望したといふならば幾度でも自殺のやり直しをして、初一念を通すべき筈なのに、大抵は、といふより殆ど全部の人が、一遍やればもう澤山、あとは知らぬといつた顏つきでケロリとしてゐます。

五尺の體の置きどころのないほど狹かつた世の中が、急に廣くなる筈もないではないか、といふ人もありませうが、それは全く急に廣くなつたのであります。

こんな芝居（たしか曾我廼家だつたでせう）を見たことがあります。

――思ひ思はれた男女が、添はれぬ果敢なさから、この上は心中だと、川に身投げをしましたが、二人とも別々に流され、別々に助けられました。助かつて見ると、思ひつめて死なうとしたことが馬鹿らしくなり、心をいれかへて懸命に働いてゐるうち、二人ともそれ〴〵配偶者を得て結婚し、朗かな家庭をつくりました。それから十年後に、偶然の機會で二夫婦めぐりあひ、昔のことを語つて笑ひ興じたといふのでした――。

心機一轉しさへすれば、五尺の體のおきどころのなかつた世の中が、急に涯しのないほど廣く大きくなります。首を右に曲げれば闇黒、左に廻せば光明――、自殺をした人でも、心のもち方一つで、この芝居のやうに明るく朗かな人生を樂しめるのであります。

◇生きた「奮闘成功物語」

以上は世間によくある心中譚ですが、仕事の行きづまりから死を決したことのある人も、今を時めく成功者のなかに少くはなからうとおもひます。

殊に發明者の殆ど全部は、非常な苦しみを嘗め、生死の間をさまようた人ばかりであります。タクマ式ボイラーといふ、大きな發明に成功した田熊常吉翁も、まさにその一人でありました。

翁は初めひどい失敗から、内地にゐたゝまれなくなり、朝鮮の知人をたよつて行くその途中の船で、煩悶の果に投身しようと、夜更けてから舷側に出てゆきました。冴えた秋の月にひろ〴〵と明るい海を見てゐますと、言ひやうのない嚴肅な氣持ちになり、

「自分から生命を絶たうとしたのは何といふ愚かなことだ。」

と氣がつき、死んだつもりでやり直すことに決心したのでありました。

朝鮮に行つたが得るところなく、直ぐ内地に歸り、神戸の場末の貧乏長屋に住居を定めました。そして毎日附近の鷹取山にのぼつて、ボイラーの研究に耽つてゐるうち、疲れきつて山頂の松の根元で昏々と眠りに落ちてしまひ、夕方、心配して探

しにきた奥さんに起されて眼をあけると、蟻が體ぢゆう一ぱいにたかつてゐたといふ挿話もありました。

こんな悲慘な境遇になつても、初一念を飜へさないどころか、益々精進してゐると、ある時天の啓示のやうに頭に閃めくものがあつて、翁は「分つた、／／／」と狂氣のやうに叫びつゞけたさうですが、かくしてとう／／成功の鍵をつかんだのであります。

翁は功成り名遂げたとき、昔のことを想うて、さぞ感慨無量だつたらうと思ひます。翁はまさに死の斷崖から急轉回をやつて、一氣に光明の世界へ飛び込んだ人であります。その生涯は實に懦夫を起たしめる一卷の奮闘成功物語であつて、闇黑と光明とは背中合はせの間柄なることをはつきり證明して居ります。

自分で商賣をやつて居る人や、會社又は商店などに勤めて居る人から、よく不平を洩らされますが、この翁のやうな奮闘家の經歷を聞くと、小さな不平をブツ／／言ふのは、氣まりが惡くなるだらうと思ひます。

小さな不平だらうが、大きな不平だらうが、地位や立場に對して、不足を有つてゐると、その人は伸びて行けないばかりでなく、自らを滅ぼすことになります。親切な神は、そんなに不平を起させては氣の毒だと、その會社をく

びにしてやつて、もうこの上不平を起さなくとも濟むやうにしてくれます。同じやうに、自分の商賣は駄目だと決めてかゝると、神は、その心に副ふやうに、商賣を駄目にしてくれます。人を殺すものは環境でなくて、その人自身に外ならないのであります。

全く心のもち方たゞ一つ。憂鬱な心になれば、世の中は一切憂鬱なすがたになるし、朗かな心になれば、やはり世の中は朗かなすがたに急變化します。それは、探偵小説でおなじみのアルセーヌ・ルバンの變裝も及ばないほどの早變りであります。

だから、何かしら不平が起つたり、もう駄目だと諦める心がでましたら、こゝだ！　自分は今恐ろしい危機に直面してゐるのだと、自ら省みてつよく警しめなければなりません。

◇闇黒のドン底から

最後に私の體驗を一つ話さしてもらひます。

私は十九歳の時、新聲社を起こして、雜誌と出版をはじめ、一時は社業大いに振つたのですが、何分、血氣にはやりたがる青年時代のことですから、「勘定合つて錢足らず」といつた仕事をしてゐたため、とう〳〵持ち堪へられなくなり、その方に見切りをつけて、新規蒔きなほしをすることにしました。

それは私の二十六歳の秋であります。

從來の仕事を讓つて得た金は相當の額なので、今後の活動に事缺くやうなことはないと、大いに安心してゐましたところ、その金はいつの間にか盗られてしまつて、私は全くの無一文になつたのであります。しかもそれが單なる盗難ではなく、口にすることの出來ない事情がありましたので、私の受けた打撃は實に大きかつたのでありました。

もう自分はどうすることも出來なくなつた、いつそ死んだ方がよからう、死ぬならば――、と今おもひだしてもゾッとするやうなことを考へました。私は今一歩で闇黒のドン底へ落ちこまうとしたのであります。

が、二日ばかり寢てゐるうちにすつかり氣持ちを換へることができました。七年前に新聲社を始めた時も無一文だつた、今また無一文になつたからとて何も悲觀することはない筈だ。裸一貫で躍りだすことが、寧ろ更生の仕事にふさはしいといふものだらう――と、元氣を取戻して朗かに立ちあがつたのであります。

翌れば日露戰爭の起つた明治三十七年、私はその五月に新潮社をはじめて今日に至つたのでありますが、闇黒から光明へ――文字通りかういふ道程を通つて來た私は、闇黒と光明とは背中合せだ、ほんの紙一重の差にすぎないことを、體驗としていふことができます。

だから、人生の行路に惱んでゐる人を見ると、自分のことのやうに氣になり、「しつかりなさい。そんな情けない顏なぞしないで、朗かに笑つて、あなたの目的とするものにぶつかつて行きなさい。道はきつと拓けますよ。」かう言つて、頑張れ〳〵と聲援してあげたくなるのであります。

飛躍の機會を逃すな

◇團菊の『國姓爺』

天は、人を黴臭い舊天地から、輝かしい新世界へ飛躍させるために、言葉を換へて言へば、向上し、發展し、成功させるために、その機會を與へてくれます。而も機會は、「その時」にのみある筈のものです。

機會は鳥の如し、飛ばざるに之をとらへよ。

といふ警訓がありますが、流れる水の二度ともとに歸らないやうに、一たび去れば再び得られないものは、實に機會であります。だから、天のたまものとしてこれを握り占めるか、手を引つ込めて逃してしまふか、或は、勇敢に新世界に飛び込むか、躊躇逡巡するかゞ、人生の幸不幸の岐れ道であると云へるのであります。

明治の劇壇に團菊時代といはれてゐる、最も華やかな、わが演劇史の上の黄金時代がありました。

それは團十郎と菊五郎(先代)といふ古今の名優が時を同じうして現れ、舞臺の上で常に共演してゐたからであります。三十幾年前の昔話になりますが、私は上京してから後、どんなに生活の苦しい時でも、この團菊だけは見逃さずに來ました。

ある時『國姓爺』といふ芝居が歌舞伎座で上演されました。團十郎の甘輝將軍、菊五郎の和藤内で、滿都の好劇家の血を沸させる好取り合せでありました。

私が觀に行つた日のことです。これからいよ〳〵『國姓爺』が始まるのだと固唾をのんで待つてゐましたが、幕はなか〳〵あきません。三十分、一時間とたつて見物は次第にブツ〳〵文句を言ひだした頃、肝腎の菊五郎が急病だといふことが分つて、がつかりしてしまひました。

が、菊五郎に代つて和藤内を立派に、而も團十郎を向うに廻してやれる役者なぞ

は勿論ないのです。一體、座の方では何うするつもりだらうと、多くの見物と共に私も、不安の思ひをしてゐました。するとそのうちに、和藤内の代役は家橘と決つたといふことを聞いて啞然としました。家橘といふのは、今の羽左衛門氏の若い頃の藝名で、その當時は、づぼらで不眞面目だといふので評判甚だ香ばしくなく、いゝ役がつかなかつたのであります。まさか

そんな人にこの大役をさせはしまいと、半信半疑でゐるうちに、幕があきました。やつぱり羽左氏でした。が、おや〳〵と思つたのはほんの一瞬で、忽ちその素晴らしい藝に魅せられてしまひました。

花道を飛んでやつて來た時の颯爽たる風姿、六尺の長刀を提げて團十郎の甘輝に迫る意氣込み。微塵のすきも、ゆるみもなく、滿場たゞ醉へるがごとく見とれてしまつたのであります。

長い間この人の體につき纏つてゐた「づぼら」の名は、どこかに消し飛んでしまつたことは云ふまでもありません。

◇羽左衛門氏の妙技（ファインプレー）

こゝに私たちの學ばねばならぬものがあります。

菊五郎が急病で仆れた時、座の幹部たちは、驚いたが、すぐ二三の俳優に向つて代役の交渉をしたことは、勿論でありませう。その人達が辭退したので、弱りきつ

た幹部は、羽左氏に話を持つて行つた――、私はかう想像します。なぜかといふに、そんなに評判のよくない羽左氏のところへ、始めから交渉する筈がないからであります。

然るに、羽左氏は話を聞くや否や、

「ようがす、やッつけやせう。」と、何の躊躇なく、たゞ一言の下に引受けて舞臺に出たのだ――。私は次にかう想像するのであります。

先代菊五郎の技倆が「百」のものなら、羽左氏は「二十」か「三十」しかなかつたのでせう。これは大變なヒラキです。彼はどうしてこのヒラキを一足飛びに飛び越すことができたのでせうか。相當の技倆がありながらそれを發揮し得る機會を惠まれなかつたこの俳優は、至難の代役を賴まれた時、「やッつけやせう」と一言の下に引受けた、すばらしいその意氣込みは、彼が身内に潜んでゐた眞技倆を、全身の血管に湧き沸らせてあの潑剌さとなり、あの颯爽さとなり、意氣鋭く、迫力強く、大きなヒラキを一氣に蹴飛ばして立派な和藤内になりおほせたのであります。言葉を

換へて言へば、彼は、「菊五郎の代役」といふ、恐らくは二度と來ない絶好の機會をムンズと掴んで、まつしぐらに新しい世界へ飛躍したのであります。

かくして、殆ど前途を嘱望されてゐなかつたその人の前に、堂々たる位地が齎されたのでありますが、これは、身を宙に躍らして、高い横木の上を見事に飛び越える棒高跳びの妙技にも比ぶべきものでありませう。

◇機會は氣が短かい

新しき世界へ飛躍させる機會は、常に人の來つて捉へることを待つてゐるのであります。その機會をなせ逃す人が多いかといふに、自分のこの力量で果して大丈夫だらうかと首をかしげ手を組んで、考へてゐるうちに、氣の短い機會はサッサと外に廻つて行つてしまふからであります。

「これでは一生うだつが上らない」「自分はこんなみじめな境遇で終つて了ふのか」などゝ愚痴をこぼす人があります。生涯を下積みで終ることは、決して幸福ではな

いのですが、しかしかういふ人たちも、長い間には、高く飛躍のできる好機會に、二度や三度は必ず見舞はれたに相違ありません。そのとき、役にも立たぬ引込み思案が、折角與へられた好機會を逸してしまつたのであります。

これに反して大きな仕事をして來た人、例へば大會社、大銀行等で重要な椅子を占めてゐる人たち、又獨立で世間に眼立つやうな事業をして來た人々は、その出世の道中で、上の地位に就くことを求められた時、尻込みをしたり、暫く考へさせてくれなどゝ、踏んぎりの惡かつた人は、一人もない筈であります。

こゝに於いて、

「人間といふものは、ある地位に置くと、その地位に適當な人物に變化し、頭腦も、腕前も、風格も、それに相當して來るものである。」

といふのが、動かせぬ眞理であることを悟らさせられます。尤も、よい地位におかれたからと言つて、有頂天になつて努力することを忘れたら、元の默阿彌に逆轉するのは云ふまでもありません。その地位に置かれたといふ自覺あつて努力してこ

そ、地位に適はしい向上をするのであります。

意外なところから拔擢されて、あれでは貫目がどうかなどゝ思はれた新しい大臣が、暫くその位置に居つて勉强してゐるうちに、おのづと貫祿が具はつて來て、議會の辯論應酬なども板につき、難局に處して非常な力を現はすことも、珍しからぬ所であります。

◇新世界へ飛躍の資格

よく官廳や會社などで、椅子の入れ替へがあります。折角庶務の仕事が呑み込めたと思つたら、不慣れな會計に廻されたり、關西方面の仕事にやつと自信が出來たのに、東北にやられたりしますが、それに不平を起こしてはなりません。地位を替へられることは、その人にとつて、一段向上すべく運命づけられたものであります。よし轉任によつて俸給が何程か下つたやうな場合でも、それは未だ知らない仕事を覺えて自分の世界を廣め將來の飛躍の準備をするのだと、喜んでその新地位に

つけばよいのであります。宴會の席で、與へられた椅子はどんなところであらうと一向に頓着せず、平然と箸をとるやうな氣持で仕事をやつて行つたら、その地位が要求するだけの働きはどんなにでも出來るものであります。

こんな實例があります。

私の社の宣傳部のなかに、新聞雜誌等の廣告用の版を書いたり彫つたりする係りがあります。一昨年のこと、そのうちの

一人が事情あつて急に退社することになりましたので、その方の相談役の某氏に、早速、一人補充をたのみますと、

「今度は社内からとりませう。それには、Sといふ少年がいゝと思ひます。」

と言ひました。

S少年といふのは、彫刻などには經驗も知識も持合はさない、たゞの子供に過ぎないのです。それを、さういふ方面に拔いたところで、間に合ふまでには可なりの年月がかゝりませう。これは少々呑氣すぎる話だと思ひ、その旨を言ひますと、

「あの少年には見どころがありますから、是非引き上げたいと思ひます。さう決りましたら、彫刻室の中へ入れて、外とはあまり關係のないやうにして下さい。」

と言ひました。

彫刻の方の事は、信用して相談してゐる人に斯うまで言はれたのですから、その通りにしますと、驚いたことは、十日ばかりで、もう刀の使ひ方を呑みこみ、一ケ月あまりで一寸した仕事は間に合ふやうになりました。

最初この少年に言ひわたした時、何のためらふ樣子もなく、素直に引き受けましたし、後で聞いたことですが、自分は大勢の中から拔擢されたのだといふ感激、自分は最早給仕ではなく、彫刻係りだといふ認識。そしてこれに伴ふだけの努力をしなければならぬと決心したさうであります。これでは、新しい世界に飛躍する資格に少しの缺けたところがありません。彼は今ではもう社内で大事な仕事をする一人となつたのであります。この心構へこそは、評判甚だ香ばしからぬ家橘が、一代の名優羽左衛門に飛躍した心構へでなければなりません。

どんな人の前にも、向上し發展せしめる絶好の機會は常に往來してゐます。いかにしてこれを掴むか、その呼吸や工夫を悟入する上に於いて、以上、聊かの參考ともならば、私の大きな喜びであります。

人はなぜ貧乏するか（上）

別題、人はどうすれば幸福を掴めるか

◇資本金二圓五十錢

大阪でパン製造業者として聞えてゐる米谷政次郎氏が創業當時の資本金は、實に二圓五十錢でありました。その時、氏は、

「自分は、金がない上に商賣の經驗も薄いから、朝早く起きて他の人よりよけい働き、よけい節約しよう。」

といふ決心の下に、夫婦死物狂ひになつて稼ぎだし、近所の得意先きは勿論、學校、會社、海水浴場、運動會、どこでも人の集まるところなら出掛けて行き、根か

ぎり賣つて歩きましたが、一面にはできるだけ節約をしたのでした。

ある夜、政次郎氏は夫人に向つて、

「今日は少し儲けが多かつた、久しぶりにうどんでも食べないか。」と言ふと、

「どうぞ、あなただけお上り下さい。私はもう少し遠慮いたします。」夫人は微笑しながら言ひました。すると氏は、

「おゝ、よく言つてくれた。私はうつかりして儉約を忘れるところだつた。」と喜びました。その後四年間も、うどんを食べなかつたといひます。

パン屋を開いてはじめての正月（明治三十九年）に、心ばかりのお祝ひに澤庵を買ひ、他家からもらつたお神酒を酌み、雑煮すら節約しました。（巨萬の富者である今日でも、正月には澤庵と冷酒を用ひて居るといふことです。）その時、全部の拂をして殘つた金が二錢五厘でありました。夫婦はそれを押し戴き、これで立ち上るんだと申し合ひました。

その後四年經つた冬のある晩、大阪の北區に大火がありました。氏は天神橋の上

から、消防夫が命がけで働いてゐるさまを見て、同情感謝の思ひがひし〳〵と胸に迫り、店にあるだけのパンを提供して勞を慰めてあげようと、東署に出頭して快諾を受け、澤山のパンを車に積み、夫人に後を押させて持つて行きました。

しかるに間もなく署からパンの催促がありましたので、不審におもつてしらべると、前に持つて行つたのは、他署の人々の受持つてゐるところで、東署の人々は堀川を固めてゐることがわかりました。そこで直ぐにあるだけの金を以て、市中のパンを買ひ集め、そこへ持つてゆきました。

署長はこの篤志に深く感激し、火災中の佳話として新聞に發表した爲め、氏の存在は大阪人の耳目に刻印されたのであります。

消防への寄附で、店には商品も原料もなくなり、一時途方にくれましたが、夫人は萬一の場合をおもひ、屑などの不用物を賣つた折々の金の貯へが五圓あまりあつたので、これを火急の資金にあてました。しかるに火事は米谷氏の店を廣く世間に知らせてくれたので客は殺到します。夫婦のてんてこ舞ひをしてゐる樣を見兼ねた客

の中には、店の仕事を手傳つてくれる人も出てくるといふ風で大繁昌を來しそれからめき〳〵發展して、今日に至る地盤を築きあげたのであります。

◇成功祕傳八ケ條

以上の話の中から、私たちはどんなことを敎へられるか、これを檢討して見なければなりません。

第一は、この夫婦はひどい貧乏の中に居つて、少しも貧乏に惱みを有つてゐなかつたことを先づ感じます。

第二は、人より多く働くといふ決心

で、根かぎり努力したことです。

第三は、夫婦の仲がよかつたこと。二人氣を揃へて働き、折角のうどんも妻の言葉で、少しのこだはりもなく止めました。

第四は、世のため人のためにならうと念願してゐたことは、窮乏の中から消防夫にパンを提供したので分ります。

第五は、他の間違ひに對して不平を思はず、パンを二度まで持つて行きました。

第六は、成功しても成金氣分など出さず、今に尙ほ冷酒と澤庵で正月を迎へてゐることです。

第七は、金を大事にしたことは、二錢五厘の金を押し戴いたのでも明かです。

第八は、朝早く起きたことです。商賣柄、當然とはいふものゝ、同業の人だちよりも屹と早く起きたことゝ思はれます。

もつと細かく調べたなら、更に擧ぐべきものがありませうが、しかし以上の八ケ

條は、貧乏の泥沼から足を洗つて向上の道へと進んで行く人の必ずなくてはならぬ重要資格であります。

人はなぜ貧乏するか、或は、人はどうすれば幸福を掴めるか——。米谷氏の努力談は、この問題に對して一應の解答を與へてくれたのですが、なほよく呑み込んでもらふために、次に詳しくお話をすることゝします。

◇貧乏を苦にするな

生れ落ちて富貴の境遇にゐる人は、ほんの少數であつて、大部分は、貧しい生活をしてゐます。その中から頭を擡げて相當の立場をつくつた人は、例外なく米谷氏のやうに、貧乏の中に居つて貧乏を少しも苦にしなかつたのであります。この一事を先づ胸に刻みつけて下さい。

私たちはどんな境遇にあつても、それとよく調和して行かなければならないのであります。自分は何の某といふ貧乏人の息子としてこの世に生れたことは、今

更どうにもならぬ運命である以上、その運命を呪つて、なぜ岩崎家の次男坊に生れなかつたかと殘念がつたり、どうして三井家の親戚にならなかつたのかと不平を起したところで、始まらない話であります。

この運命といふ意味を、もつと適切な言葉で示せとなら、「大自然」の法則の現れと云ひませう。世の中のことでこの法則に外れるものは一つもありません。例へば夏どんなに暑さが嚴しくとも、夏の暑いのは自然の現れですから、それを苦にしたところで、何うにもならないのであります。寧ろ夏は一切の物の生ひ育つ時、五穀もこれで熟するのだと感謝の氣持を有つやうになれば、暑さは少しも苦にならず、食物がうまく、體が丈夫になつて、夏痩せなどはしないものであります。

この、夏を苦にしないといふ心持で、貧乏の中にゐなければならぬ、――私の言ひたいのはこれであります。貧乏を厭だとじたばた騒げば騒ぐほど益々深みへ沈んで行きます。その證據には、暑さを苦にすれば、暑さは體内に喰ひ込むやうに烈しく感じられますし、又、病氣をした時、早く治るだらうか、この上惡くなつたら何

うしようか、などゝ樣々に氣をつかふと、病氣は惡い方にどん〳〵進んで行きます。病氣のことなど思ひ出す餘裕もないやうに一生懸命に働いてゐますと、大抵は不思議なほど早く治るものであります。手近な例をあげますと、體に腫物ができたとき、それを氣にして搔いたり摩つたりしてゐると、なか〳〵癒りませんが、打捨つて何うもしないで置けば、知らないうちに痕跡もなくなつてしまひます。

これは病氣ばかりでなく、一切の場合に當てはめて言へます。貧乏の中に居つてそれに囚はれず、平然としてゐることができれば、心は常に豐で、のび〳〵と明るくなり、そこから向上發展の道が拓けて行くのであります。

◇貧乏神の棲み家

が、貧乏を苦にしないといふのは、貧乏を簡單に「諦め」てしまふことだと取違へては大變です。諦めるといふのは、貧乏に負けてしまふことです。よくあの人は貧乏臭いなどゝ言はれますが、貧乏の中から立ちあがる氣力が無くなつて、何をす

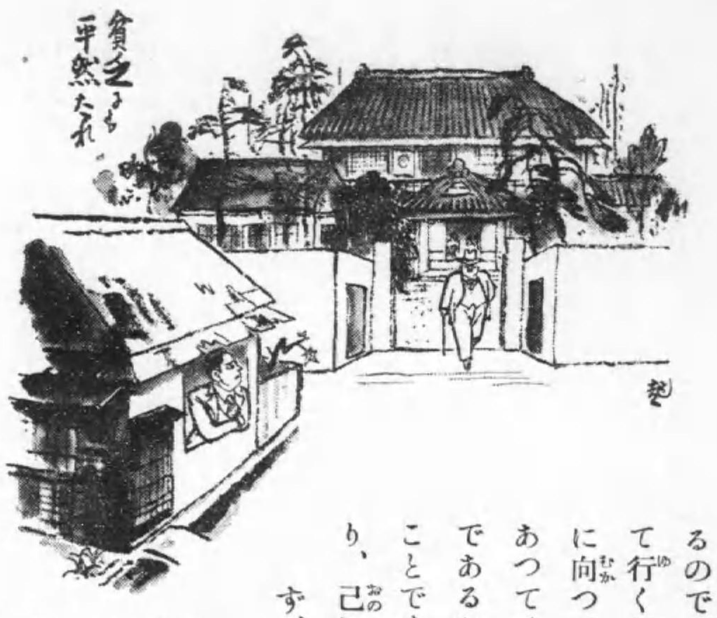
るにも物ぐさくなると、家の隅々どこを嗅いで見ても、貧乏のにほひがします。貧乏神はこれこそ我が家なりと喜んでやつて來ます。

貧乏神が頑張つてゐると、たま〳〵福の神が來ても、入ることが出來ないので門前を素通りしなければなりません。俳人一茶に、

我が宿の貧乏神もお伴せよ

といふ句があります。が、一茶のやうに、貧乏臭くなりますと、こんな結構な家はないと貧乏神は定宿にします。神無月にお前も他の神さんたちと一緒に出雲へ行つたらよからうと云つても、貧乏神は、あまり住み心地がよいので、いつかなこの家を去らうとしないでせう。

世の中には、貧乏は運命だから、苦しいけれども堪へ忍ぶのだ、貧乏神の同居も仕方がないと言つて齒をくひしばつてゐる人もあります。かういふのを、克己奮闘だと言つて賞めるやうですが、己れに克つことなどは、到底出來るものではありません。それは痩我慢です。我慢に肥り我慢なく、皆痩せ細つて行くのは、無理をす



るので心はとげ〳〵しくなり、健康が失はれて行くからです。私達の生活は、水の低きに向つて流れるやうに自然で、少しの無理もあつてはなりません。では何ういふ態が自然であるかといへば、それは何時も朗かであることです。いつ如何なる時でも、人を嫉んだり、己れを卑下したり、腹を立てたりなどせず、明朗そのものでありたいのです。

學校を一緒に卒業した友人は、もう立派な門構への大きな家に入つてゐるのに、自分はこんな見窄らしい生活をしてゐる、何といふ情ないことだらうなど〵、自ら恥ぢて、陰鬱になるやう

では駄目です。家の大きいのは勿論よいが、小さいのは拭き掃除に面倒がなく、家賃が廉い上に、隣り近所の交際に張り合ふ必要もなく、結句經濟になるからこれも結構――だ。こんな調子で、平然としてゐて欲しいのであります。

これは決して痩せ我慢ではなく、また貧乏と妥協したのでもなく、少しも貧乏に囚はれない姿であります。

「運命を呪ふものは運命に呪はれる」といひますが、全くその通りであつて、貧乏を苦にすれば、いよ／＼貧乏になるのが大自然の法則であります。運命を呪ふ心はどこへも行かず、たゞ自らのうちに毒素を生みだすだけであることを知らなければなりません。

◇私の體驗から

前々から述べ來つたところを要約すれば、貧乏だとか貧乏でないとか、そんなことに少しもこだはつてはならぬといふことであります。そしてその次ぎの心構へとしては、自分の「天職」とする仕事に驀進するのです。人おの／＼神から授かつた天職を有つてゐる以上、自分の境遇はどうあらうと、そんな事など氣にしてはならない筈です。

私は以上の言葉を裏書きするため少しばかり體驗を話さしてもらひますが、私の家庭をもつたのは二十一歳の時でした。その前々年から文藝書の出版をやつてゐましたが、資本などは少しもない上に、援助者といふほどの人もなく、文字どほりの徒手空拳で、今から考へて見れば、まさに貧乏のどん底にゐたと云ふべきだつたでせう。私たち夫婦が滿足に三度の飯を食ひ、滿足に時々の着物を着たことなど三四年はなかつたのであります。

併しその間、貧乏で困ると思つたことは、實際一度もなく、否、貧乏であるとさへ思つたこともありませんでした。たゞ仕事の面白さ、仕事の有難さに、何時も元氣で働きづめに働いたのであります。

今から當時のことを思ひだしても、みな明るい朗かな記憶ばかりで、暗いじめ／＼

した思ひ出などは、一つもありません。

私はこの時代とそれからも長くつゞいた貧乏生活に於ける體驗を通して、大阪の米谷氏の創業時代の氣持がよく分ります。氏があんなひどい狀態にありながら、消防署へパンを提供したのは、貧乏に囚はれてゐなかつた何よりの證據であります。人は貧乏など氣にしないで、立派に立つて行かれるものであることを、私は、はつきり申上げることが出來るのであります。

この稿更に次篇につゞく――

人はなぜ貧乏するか（下）

◇福運傳授の看板――夫婦の和合

人はなぜ貧乏するか、どうすれば貧乏の世界から拔け出て幸福を摑めるか――。これについて私は、まづ貧乏を少しも苦にしてはならぬと云ひました。どんなにひどい貧乏であつても、貧乏であることさへ忘れてしまふやうな心境であつて欲しい。貧乏に囚はれては、愈々貧乏になるのが大自然の法則だからと言ひました。

さて、その次に、どんな心構へであればよいか。

これを述べようとして憶ひだしたことは、ある道話のなかの話であります。それは福運傳授といふ題目で、貧へ歩むか、福へ進むか。道の岐れ目に立つて思ひ惑ふ人のために面白く說いたものであります。私はこれを假りて、私の貧乏物語を

進めてゆかうと思ひます。

×　×　×

その話といふのは――、昔、ある壯年の男が、町を歩いてゐると、『貧乏を富貴となす祕法傳授』といふ看板を見つけました。これは有りがたいと早速飛び込み、規定の料金を拂つて傳授を乞うたところ、白髮長髯の翁が現れて、

「これから、七日の間、身も心も淨めて來るがよい。その上で、祕法の傳授をいたさう。」と申しわたしました。

その男、家に歸つて七日の間よく〳〵慎み、八日目に行つて見ると、繪にも見られないやうな美しい婦人がでゝきて、奥まつた室に通し、主の翁は留守なればゆつくりなされよと酒肴を出して、愛嬌たつぷりのもてなしに、妻のことも家のことも忘れはて、うつゝを拔かして心が亂れかゝつた時、かの白髯翁現はれて、

「これは何といふ樣だ、酒色に溺れて家も妻も忘れるやうな者が、福運を授かりたいなどゝは片腹痛い。早々立ち歸り、更に七日の間心を淨めて來い。」

と叱られたので、かの男は夢の覺めたやうな心地し、驚き恐れて自分の家に歸りました。

×　×　×

この第一條こそ貧より福へ轉ずる最も大事な道であります。

夫婦は完全に和合して始めて一切の事が花を咲かし、實を結ぶものであります。私の夫とたのむは天上天下、この人たゞ一人と歡び敬ひ、自分の妻といふは、世界幾億の婦人の中でこの一人と、愛しいつくしみ、どちらも他の異性に

心を惹かれるやうなことがあつてはなりませんし、又、互ひに牙をむいていがみあふやうな眞似など、絶對にしてはならないのであります。

皆さんは、前回の米谷氏夫妻が荷車を挽いて行く挿繪を御覽になりましたでせう。梶棒を握つてゐるのは夫、後を押すのは妻、夫婦心を一つにして、同じ足どり、同じ調子で、一生懸命に車を進めて行くさまは、涙ぐましいほどの感激を起させます。あれはパンの箱を積んで行くのですが、「家庭」や「仕事」などの一切を車に乗せ、人生の山坂を越えて行くのは、夫婦二人の力であります。

と言つて妻は、夫の仕事に携はつて行けといふのではありません。夫は繪をかくからといつて、妻も繪を習つて手傳ひをする必要などはなく、夫は妻を心から愛し、妻は夫の心を心として少しも反くことなく、夫婦が完全に結合してゐると、繪を描く夫の筆の力は、二倍も三倍も加はつて來る――これをいふのであります。商賣などは、夫婦ほんたうに心が合はなければ、斷じて繁昌するものでないことは、論より證據で、實例はいくらでも擧げられます。一切のことを唯物的にのみ解釋しようとする人には、この間の靈妙な、深い味はひは分りかねると思ひますが、これは疑ふ餘地のないことであります。

夫婦とはかういふものであるのに、折角福運を掴まうとして行つて、美人の媚笑にうつゝをぬかしてしまふなどは、呆れる外ありません。しかし世間には、これに類した話が決して少くはあるまいと思ひます。だから、人はなぜ貧乏するか？　といふ問に對する私の答の一つは、夫婦が完全に一致してゐないところに、大きな原因があると言はなければなりません。

◇短氣は損氣

さて、かの壯年の男、七日の間心を淨めて行きますと、主がるすなのか、いつまでも待たせておきながら何の音沙汰もありません。あまりのことゝ業を煮やし、ブツ〳〵言つて歸らうとすると、かの白髯翁現れて、

「汝、短氣は損氣といふことを知らぬか、腹の蟲が直ぐ苦情を言ひ出すやうな、小

さな、けち臭い根性で、人に優る福運が得られると思ふか。何よりも根氣が第一。更に七日の間心を淨めてから來い」と、また追ひ出されました。

× × ×

どんな人にも、辛抱、堪忍、根氣が肝腎であります。商ひとは「倦きない」だとも言はれますが、單に商ひのみならず、あらゆる仕事、皆倦きることなく、一歩一歩の努力を重ねて行かなければなりません。

ある家の番頭で、極めて實直な男が、主家に長らく勤め、いよ〳〵獨立して商賣を初めるとき、主人は膝許に招いて、

「今までよく勤めてくれたが、これから獨立して仕事をするとなると、また格別の心がけが要るものである。それで將來、家運を興す法を教へよう。」

と言つて、井戸の側へつれてゆき、

「この釣瓶で、盥に水を一杯入れよ。」

と命じました。さてその釣瓶をもつて水を汲まうとすると、釣瓶には底がありま

せん。日ごろの主人にも似ず、非常識、非道なことを言はるゝものだと恨みましたが、實直な男だけに、主人の命令だからとおもひかへし、何遍も何遍も水を汲みましたが、底なしの釣瓶では水のたまる道理はありません。

すつかり絶望して、しばらく茫然と立つて居りますと、そのぶら下つてゐる釣瓶からポトン、ポトンと雫

が井戸の底の水に落ちる音がするのです。

「よし、これだ！」

と氣がつき、釣瓶を盥の上で振つてはその雫を溜め〳〵するうちに、一晝夜でとう〳〵盥に一杯となりました。辛抱が第一といふ主人の情の籠つた教訓が腸に浸み込み、涙を以て感謝したといひます。

米谷氏が、貧乏のどん底から今日あるに到つたのも、夫婦努力の一雫々々が、遂に盥に一杯となつた結果に外なりません。

◇たゞ努力一つ

さて、かの壯年の男、三度白髯翁の家を訪れますと、今度は立派な座敷に通されました。見ると、屏風、懸軸、額などから、庭の手水鉢、燈籠、飛石にいたるまで、一々贅を盡した素晴しさに、驚きもすれば羨ましくもなり、福運傳授を受けたら一刻も早く大金を儲けて、あれも求めよう、これも備へようなどゝ、頻りに考へて、

もう一廉の長者になつたやうな氣持でゐると、白髯翁現れて、

「人の財寶を羨んで、それがために慾心を起すやうでは、心が汚れはてゝゐる。そんなことで福德を得られると思ふか、早々、出直せ。」

と、又々ひどく叱りつけられました。

× ×

これは叱られるのが當然ですが、多くの人の胸の中には、この男と似た心が、うごめいてゐるやうであります。私たちは毛ほども貧乏を苦にしてはならぬ以上、ひとの富に心を惹かれるなどは、愚かな沙汰であること今更いふまでもありますまい。然るに事實は、徒らに成功者を羨んで、一歩々々向上の道を辿ることを面倒臭がり、ひと思ひに高い所に飛びつかうとあせる人が非常に多いやうです。

しかしそれは何といふ馬鹿な事だと一概に笑つて退けるわけにはゆきません。最小の努力で最大の結果を掴むのが致富の祕訣だといふのは、現代の常識だからであります。が、そんな狡猾な考へで金は儲かるものではないのです。一攫千金を夢見

る賭博根性などをだしては、悲惨な運命が必ずやつて來て、遂には自らを亡ぼし、一家一族まで、不幸に陥らせることになります。

要するに、人間は命がけで働くより外に何の途もありません。その眞劍な努力の量を數に現はして「十」とすれば、收穫も「十」であり、「百」とすれば收穫もまた「百」となります。天は公平であつて、どんな人どんな場合にも少しの妥協がなく、原因と結果とは常に平行して絶對に狂ひはありません。だから貧乏のどん底にゐて貧乏であることさへ氣がつかず、世のため人のためになる正しい仕事に向つて、せつせと働きますと、いつの間にか自分の位置は向上し、いつの間にか金も出來てくるものであります。それは正しい仕事に對する天の公平なる報酬であります。

「精出せば氷る間もなき水車」といふ句がありますが、精だして働きさへすれば、金錢の運用滯ることなく、くる〳〵と水車のやうに廻るといふ意味です。思ひ出したら口吟むのも、己れを鞭つ戒めとなりませう。

金について、序に一言しますが、金、金といつて、金錢のための人生といふやうな考へは、もちろんいけないのですが、その反對に、金錢を輕視する人を、立派な人格者のやうに思ふのも間違つてゐます。金は、身を立て家を興す上に大事であると共に、國家社會に役立つものである以上、どんな些細な金でも決して粗末に取扱ふべきものではありません。バラ錢のまゝヅボンのかくしに入れて無造作に出し入れしたり、机の抽出の隅に、白銅や銅貨などを、埃にまみれたまゝ置いたりする人で、金に惠まれたといふ話は、あまり聞かれまいと思ひます。

◇金の生る木——貧乏神退散

さて、かの壯年の男、いろ〳〵の教を受けたことが嬉しく、更に七日の間心を淨めて、八日目の朝、夜のしら〴〵明けに起きて白髯翁の家に行くと、翁は欣然として迎へ、

「度々の教訓よく守つて神妙であるのに、今かく朝起きするやうになつて、汝の顏に貧の相は消え失せた、福運を授かること疑ひない。」

と言つたといふところで、この話は終つて居ります。

× × ×

なるほど、夫婦仲よくして酒色に迷ふな、辛抱は第一、人の富を羨まずに眞劍に働け――かう說いてくると、どうしても朝起きで結ばなければなりません。

元來人は太陽と共に起き、身も魂もその光りに淨められて仕事にかゝるべきものであります。少くとも太陽が中天に昇つたのに、尙ほいぎたなく寢てゐるやうでは、その人の仕事から芽は吹きだしません（夜遲くまでやつてゐる商賣は例外として）。

前回の米谷氏も朝起きの人でした。某氏、某氏、某氏、數へて見れば、成功者の殆ど全部は朝起きの人です。寢坊の建てた土藏は無いと昔から言ひますが、貧乏神の一番好きなのは、黴菌と同じやうに日の光りの射さないところであります。

徳川家康は、近侍のものたちが、金の生る木といふものは本當にあるかどうかと話しあつてゐるのを聞かれ、白紙の眞中へ一本の棒を引いて、その眞上に「朝起き」と書き、それから、左右に一本づゝ書き足し、右に「正直」、左に「働き」と書き、

「これが金の生る木ぢや、朝起きの幹に、正直と働きの枝があれば、大判小判は願ひのまゝぢや。」

と敎へられたといふ話が殘つてゐます。幸福を生みだすところの根幹は、朝起きだといふことが分つて見れば、どんな人でも蒲團にしがみついて寢坊はして居られなくなりませう。

では、窓といふ窓、戸といふ戸をすつかり開け放つて、太陽の光りの照らさぬかげを無くし、一生懸命に働いて、「わが宿の貧乏神」に一刻も早く出て行つて貰はうではありませんか。

最後の最後まで頑張れ

◇梯子乘りへの警告

二三年前の消防出初式の日のことですが、私の社の前でも、梯子乘りがありました。

三間半の長梯子が立てられると、一人の若者が、する〳〵と身輕に登つて行きました。梯子は竹なので、ちよつと動いても左右どちらかに、ひどくしなひます。その上で放れ業をやるのですから、見物は手に汗を握つてハラ〳〵してゐました。

かれこれ五分間、ひと通りの藝が終ると、その若者は、梯子を降りだしました。中段ごろまで來たとき、突然、

「氣をつけろ！」

といふ鋭い聲がします。それは、さつきから唇を一文字に結んで、瞬きもせずに見つめてゐた組頭の口をついて出た言葉でした。

私はハッとして梯子を見上げましたが、何の變つたこともなく、乘り手は無事に降りて來ました。

その後、組頭に會つた時、「氣をつけろ」と

叫んだわけを訊ねますと、

「藝をやつてゐる最中は、割合に怪我をしないものですが、危ないのは降りるときですよ。仕事が濟んだといふ安心で、つひ氣をゆるすのでせうね。そこで、一寸注意したのです。」と言ふのでした。

昔から勝つて兜の緒をしめよといふとほり、勝つたからとて油斷をしてはならないのに、未だ勝ちおほせぬうち、卽ちその事が完了せぬうち、油斷をするやうでは、謂ゆる九仞の功を一簣に缺くことになります。土を盛つて九ひろの山を築かうとする場合、最後の一もつこを怠つては、その仕事は出來あがらないのであります。

だから、いついかなる時でも頑張り通さなければなりません。よく、終始一貫と言ひます。事業に成功する第一要素は、終始一貫にありと云つてもよいのですが、これは容易にできることではありません。例へば、一年間これ〳〵のことを續けると誓つた場合、三百六十四日までやつても、終りの一日を休んでは、もう終始一貫でなくなります。

だから、最後の最後のぎり〳〵まで、頑張れといふことになるのであります。

◇喜び過ぎてはならぬ

具體的に二三の例をあげますが、まづその第一はお産のことです。

産後の肥立ちが惡いため、苦しみ惱まされる人が少くありませんが、それは最後まで頑張りつゞけないからであります。體がすつかり妊娠前の狀態に復つて、はじめて分娩といふ仕事は終つたことになるのです。それを赤ン坊が出ると、やれ〳〵よかつたとすつかり安心して、長い間の緊張を、一ぺんにゆるめてしまふため、體の調子が狂つて、いろ〳〵の故障が起るのであります。赤ン坊が出たからとて油斷をしてならないのは、あの梯子乘りが、藝を終つた後の緊張が大事なのと同じことであります。

病氣もその通りです。とても駄目だらうと思はれた重態の患者が、ぐん〳〵よい方に向ひ、起きて歩き出されるやうになると、當人の喜びは大へんな上に、家族も

有頂天になつて騒ぎだします。すると、俄かに又元の重態に戻つて、到頭いけなくなつてしまふ例は、實に多いのであります。

世間では、これを「仲直り」といひ、蠟燭の灯がいよ〳〵消えようとするとき、パッと明るくなると同じことで、結局は駄目に決つて居るといつてゐます。が、これは大抵の場合、快い方に向つたといふ喜びに酔ふため、緊張が消し飛んでしまつたからであります。

人は、朗かでなければならないのですが、しかし喜び過ぎることは、ふかく戒しめなければなりません。喜んで悪いわけはないのですが、その度を過ごしては、心の緊張を缺いて禍を招くのであります。元來、どんな事でも必ず「原因」があつて現はれる「結果」であります。喜ぶことも、やはりそれだけの原因がちやんとあつて、決して偶然に湧きでたものではないのですから、何も羽目をはづして騒ぐには及ばない筈であります。

子供を御覧なさい。菓子や玩具を貰つてニコ〳〵しても、ほんの一時であつて、

直ぐ外の事に氣持が向ひます。子供は決して喜び過ぎません。私たちは、あれに倣ひたいものだとおもひます。

◇隱居生活と恩給生活

お産や病氣ばかりでなく、どんな仕事でも頑張り通すか通さぬかによつて、運命が岐れてまゐります。

商賣が少し順調に向ふと、大へんな喜び方で、ふは〳〵と足が地についてゐないほどの浮かれ方をするが、調子がわるくなると、すつかり悄氣て、意地も張りもなくなつてしまふ、こんな人は決して少くはないのです。

勝てば兜の緒をしめる、負けては一層心の箍を固くする。得意にも失意にも、緊張を缺かない、といふ決意が大事であります。それは畢竟、人間の一生は緊張の連續でなければならないからであります。

たとへば、人は七十にならうが、八十にならうが、相當の仕事を求めて努力して

こそ元氣を失ふことなく、健康を保つてゆかれるのです。然るに、日本の風習として、親が老年になると隱居といつて、何一つ仕事をさせないのが、天晴れ親孝行といふことになつてゐますが、何ぞ計らん、これこそ親不孝のどんづまりであります。

なぜかといふに、老年になつて、仕事をとりあげられて頑張りができなくなつては、「死」に向つて一直線に飛び込んで行く外ありません。親の命を縮めて何の孝行なのでせう。

恩給生活に入つた人なぞも、餘程の緊張を要します。役者が花道を引つ込んで樂屋へ行くと、もう自分の働くべき時は過ぎたと安心するやうに、これから餘生を無事に送ればよいといふ心になつては、張りも意地もなくなり、一刻々々に健康を奪はれて行きます。

だから、何か一つの事を成し遂げた人は、みな死ぬまで働きづめに働いて居ります。明治大正の大政治家たちを見るに、ハルピンで壯烈な最期を遂げた伊藤公はいふまでもなく、大隈侯の頑張りも實に素晴らしいものでした。原敬、加藤高明など

の諸氏も皆さうですが、後藤新平伯に至つては、最後まで老の來たことを知らない萬年青年でありました。

昭和四年四月三日、東京で少年團の檢閲を行ひ、その夜の急行で東京を出發、四日の午後一時に、岡山の醫學會に出席。四時には岡山を引きかへして、翌五日、東京でモツト博士を招待する——。

これは後藤伯が死の直前三日間の活動のプログラムであつたさうです。この時、伯は七十三歳。何といふ驚嘆すべき頑張りでありませう。

そして東京から岡山へ行く汽車の中で、講演の原稿に手入れをしてゐた伯は、米原附近に來た午前七時頃、突然腦溢血を起して仆れたのであります。京都でおろされた時、きけない口を僅かに動かして、「岡山々々」と二言いつたさうです。これは岡山へ行つて自分の仕事をやらなければならないといふ最後の頑張りだつたらうと思ふと、眞に頭が下らずにはゐられません。

この頃は、何々豫防デー、何々安全週間などゝ言つて、三日とか七日とか、細か

に刻むことが流行つて居ります。必ずしも惡いことだとは云ひませんが、ちやんとした心構へができて居らず、たゞ強ひられてその間だけ力むやうでは、謂ゆる何週間なり何デーなりが終ると、また元の默阿彌どころか、反動的に却つてだらけた狀態になるものであります。

だから、後藤伯やその他の人達のやうに、一生頑張り通すべきでありますが、一生などゝそんな長い辛抱ができるものかと言ふ人もありませう。遠い先きばかりを見るから、そんな考へも出るので、結局は一日々々の頑張りの連續に外ならないのであります。

例へば、田一反を耕すには鍬の數は三萬以上、植ゑつける稻の株數は一萬五千内外ださうです。これはえらいことだと驚かずに、たゞ一鍬々々に緊張し、一株々々に頑張ればよいのです。大きなものに眼をつけて、小事を忽せにするのは、大へんな間違ひであることを知らねばなりません。

◇奉天役最後の頑張り

日露戰爭は、海では日本海、陸では奉天、これが最後の運命を決したものでありますが、わけても奉天の役は非常な難戰で、いよいよ總攻擊となつた時、彈丸が乏しく兵はつゞかず、とう〳〵敵を抑へきれなくなつて、各方面の司令官は後退の已むなきを主張し、總司令部の參謀も悉く同意したのであります。

然るに總司令官大山元帥は、眞

に大山の魏々として動かざる如く、一歩でも退いてはいけない、日本軍人の流した尊い血を、一滴たりとも敵に踏ませてはならぬと、斷乎として命令されたのであります。

兒玉大將　閣下、戰況は最極度に不利であります。

松川參謀　この上に前進を續けることは全滅です、全滅です。

大山元帥　いけません。前進です。大山は生きてゐる限り前進します。

兒玉大將　閣下ッ、全滅です。

大山元帥　いけません。兒玉さん、わたしたちも、わたしを始め參謀一人殘らず死なうではありませんか。

兒玉大將　（電氣に打たれたる如く豁然とし）はつ、閣下、分りました。私どもゝ元帥閣下と一緒に死なして下さい。

田中參謀　みんな死ぬんだ。死ぬんだ。（と急ぎ下手に入る。）

大山元帥　全軍に命令を出して下さい。

兒玉大將　はい。

大山元帥　滿洲軍總司令官大山巖は一擧に敵を殲滅するの目的を以て、直ちに渾河を渡り龍王廟を經て奉天南門に向ひ前進す。各軍血戰力鬪予に從ふべし。（參謀等命令を書き取る。）

兒玉大將　しかし、閣下、龍王廟までお進みなさつては危うございます。

大山元帥　いや、總司令官の決心です。同じ死ぬなら一歩でも敵に近く死にたうございます。

（參謀等感激して走り、電話によりて各軍へ命令を傳達す。）

大山元帥　副官。

室戸副官　はい。（上手より登場。）

大山元帥　馬の用意を願ひます。

室戸副官　かしこまりました。（と上手へ入る。）

大山元帥　さあ、總司令官の旗を龍王廟北方高地に高く樹てるのぢや。

×　×

これは『元帥大山巖』（吉田絃二郎氏作）の一節でありますが、まことに、凄風生じ鬼氣寒しの感がありませう。この際、もし一歩頑張りがつゞかなかつたら、わが軍は總崩れとなり、戰慄すべき事態となつたに相違ありませんが、元帥の決意は死中に

活をつかんで、大勝利に轉ぜしめたのであります。何といふ偉大な、全日本の感謝に値する頑張りだつたでせう。

が、これは國家の運命を賭する場合の話であつて、私たちには縁が遠いことだなどゝ思つてはなりません。どんな仕事も結局は戰爭と同じで、ちよつとでも頑張りが續かなかつたら、後退しなければならなくなります。たとへば商人なら、店を擴張し、顧客を殖すことに全力を擧げる。それが幾分でも實現した時は、そこを死守して、どんな事情が湧いて來ても後退しないことは勿論、更にそこから一歩でも進み、一尺でも擴げようと努力しなければなりません。

順調に行かなくとも悲觀してはならないが、成功しても喜びに耽ることは大の禁物です。たゞ緊張をつゞけて、前進、前進――、この頑張りで、何處々々までも押し進んで行くのみであります。

世の一切は心の鏡

人を導き人と調和するには

◇地震を恐れぬ治兵衛

七八年前の、たしか初秋の頃、鴈治郎が久しぶりで上京し、歌舞伎座に出演することになりました。出しものは『天の網島』河庄の場で、彼は得意の治兵衛に扮したのでした。

さて、ある日のこと。二番目の幕があいて、鴈治郎の治兵衛が、揚幕から花道へ出ようとする一瞬前、見物はいづれも緊張して固唾をのむ折も折、あの大劇場をグラ〳〵と搖り動かす强震が起りました。

「あッ、地震だ！」と、各階をうづめてゐる見物は、色を失つて總立ちになりまし

た。出語りの太夫や三味線彈きも、狼狽して逃げ腰になりましたが、ふとその目に映つたのは、花道に現はれた治兵衛の姿です。

これを見ては、義太夫語りとして逃げだすわけに行かず、無意識に坐つてしまひました。さうなると、傍の三味線彈きも我を忘れて撥をとり直し、デン／＼と力をこめて彈きはじめたのです。

三味線の音に、幾千の見物がハッとして我にかへり、花道を見ると、鴈治郎がいつもの治兵衛の悲痛な臺詞を言つてゐるではありませんか。さしも混亂した場内はピタリと靜まつてしまひました。

鴈治郎は揚幕を出ようとする刹那のことですから、そのまゝ逃げだしたところで、誰も文句をいふ筈はありません。然るにこの七十翁は、どうして平然と花道へでゝきたのでせうか。

あの時の鴈治郎はもう治兵衛になり切つてしまつて、小春に會ひたさの一念に身を焦してゐたのです。だから『天の網島』といふ芝居に地震の場面のない以上、治兵

衛になり切つた鴈治郎には、地震など考へる必要はない筈です。彼の踏んでゐる花道があんなに搖れても、少しも心が亂れなかつたのは當然でありませう。

幾千の見物の目標は、天下の名優鴈治郎一人であり、彼によつて自由自在に動かされる心の狀態だつたのですから、鴈治郎の頭のなかのどこにも地震の恐怖がない以上、見物に恐怖がなくなるのは當然であります。もし鴈治郎に、多少の恐怖でもあつたら、見物も同

じやうに恐怖を感じたに相違ありません。現に、他の座は皆ひどく混亂したので、あわてゝ幕を引いたといふことでした。

◇青砥藤綱と心の影法師

心といふものは、こんなにも強く、又こんなにも廣く大きく反映するものとすれば、眞に驚くべきことではありませんか。古歌に、

よしあしの心に映る水鏡
よく〳〵見ればわが身なりけり

とあるのは、この世は何一つとして我が心の鏡ならぬはないといふのです。その意味を寓したものに、次の例話があります。

滑川で錢を探した話でお馴染の青砥藤綱は、ある晩、寢苦しくて蒲團の上に起きあがりますと、色の眞黑な大男が前にゐるのです。藤綱大聲で、

「人の寢所へ案内もなく入り込む不埒な奴、何者なるか。」

ときびしく咎めましたが、更に返事がありません。藤綱いらだつて枕元の棒をとつて打たうとすると、その男も棒で向ふのですが、構へに少しの隙もないのに、藤綱ふかく感じいり、おもはず持つてゐた棒を離すと、その男も同じやうに棒を離すのです。

そのなすところが、自分と寸分違はぬので、心を靜めてよく見ると、それは人ではなく、自分の影法師でありました。藤綱、手を拍つて感嘆して曰く、

「我れ今、影法師を見て始めて天地の萬物は、わが影であることを知つた。われ非道なれば、家來はわが影法師となつて非道をするであらうし、われ貪れば、影法師である家來は盗みをするに相違ない。われ色を好めば、美女の影に惑はされ、われ善を好めば、賢人の影が集るであらう……」云々。

これは世の中はみなわが心の鏡であるが、上に立つ人の心は、最も強く目下に映ることを語つたものであります。會社などを見ますと（商店も同じことです）、一人の社長、或は幾人かの幹部の心構へ次第で、全部の社員がどうにでも動かされるもの

であることが分ります。

某の會社を訪問した時に會つた社員たちが、誰も彼もみな朗かで元氣であるなら、その會社は大抵の場合、好調に向つてゐるものと判斷して間違ひありません。社運がさかんで、潮に乘つた社長その人のすばらしい元氣が、全部の社員に反映せずにはゐないからであります。

その反對に、ある社に行つて會つた社員たちが、通夜にでも來た人のやうに、すつかり滅入つてゐるなら、その社の運命は甚だ危いところに居るものと思はなければなりますまい。それは、社業の振はないのに惱んでゐる社長の心が社員に反映したのだと想像されるからであります。

目上の心は、かくまで目下に映つて行くのであります。

◇「社風」といふもの

私は、私の社の人たちに向つて、正月の仕事はじめとか暮れの仕事じまひ

とかに挨拶をする外、四角ばつた訓辭など、何か重大な事件でもない限り、殆どやつたことがありません。それは口先きの言葉だけで人は動くものでないことを、あまりによく知つてゐるからであります。

では何うするかと云ふと、私一人が精一杯働く――、たゞそれだけであります。もちろん、かうすれば社員を働かせることができるといふ算盤玉を彈いてやつてゐるのではなく、私は、仕事そのものに尊い意義を感じ、それに沒頭することが愉快であるだけであります。

ところが私の社の人たちは、みな私の通りに働きます。この社は自分の社であるといふ自覺の下に、めい〳〵の受持つてゐる仕事を、自分自身の仕事であるといふ信念で、とても熱心に働いてくれます。たまに雇人根性の人が入つて來ても、いつの間にかみんなに同化されてしまふといふ有様です。

元氣で緊張して働く――、私の社の「社風」はこの言葉につきます。これは、かく〳〵せよと號令したのではなく、くど〳〵しく訓辭したのでもなく、いつの間

にか、水の低きに流れてゆくやうに、さうなつて行つたのであります。

だから、結論として、人の上に立つには、リードして行く力――卽ち人を自分の心のまゝに動かしてゆく力が大事でありますが、しかしたゞ自分の都合からのみ打算してはならない。誰よりも緊張し、誰よりも眞劍になり、誰よりもよく働く。この精神があつて、そしてよく實行すれば、人はいやでもおうでも、附いて來ずにはゐられないのであります。

× × ×

博多の仙崖といへば、近世の傑僧として天下に知られ、その書も繪も共に群を拔いてゐるので、今に珍重されて居ります。

この仙崖が、ある時、弟子の坊さんたちがいつの間にか惡風に染み、毎晩、寺の塀を乘り越えて遊里に行き、夜の明け方にかへるといふことを耳にしました。

その弟子たちがある晩、いつものやうに遊びに出掛けて、未明にかへり、寺の塀を外から內へ越さうとすると、足はいつもの木の踏み臺とはちがつて人間の背であ

ることに氣がつきました。驚いて前へ廻つて見ますと、豈計らんや、それは師の仙崖和尙だつたのであります。

これが世間普通の師匠ならば、良くないものは破門するとか、或は諄々と道を說いて戒めるとかするのでありませうが、仙崖和尙は、弟子たちの道に背いた相は、すべて到らぬ自分の鏡であるとせられ、その責を自らに負はれたのであります。果して一山肅然として、その風儀

を改めたと申します。

◇心を急回轉せよ

一切の人は、あらゆる場合において人とよく調和して行く道を心得て置かなければならないのであります。

昔、支那の詩人は、人心の嶮しさは、蜀道の嶮よりも甚しいと歌ひました。互に欺き、詐りあひ、だまし討ち、裏切りは當り前だといふ、昔も今も變りがないこの世の中に立つて、頭を擡げようとする人は、何よりも先づ、どうすれば周圍と調和し、その人たちと同じ心になれるかといふことを知らなければなりません。

それには、世の一切は自分の心の鏡であり、影法師であることを、はつきり意識するのであります。鏡に映つた泣き顔も、笑ひ顔も、皆心の反映にすぎないやうに、人が自分に對して反感を有つたり、好感をもつたりするのは、畢竟、自分の心がその人に映つたのであります。

これを具體的にいへば、自分がある人に憎しみを有つてゐると、その人は必ずこちらに憎しみを有ちます。それは、自分の心が反映したからであつて、自分の心が變つて相手に親しみをもつと、相手の態度は直ぐ變るのであります。

明治大正時代の文豪小栗風葉氏が、ある事で訴訟された時、非常に憤慨して先方の辯護士を訪ひ、烈しい談判をしました。辯護士も負けてはゐず、語氣荒く盛んに辯ずるのです。それを聞いてゐるうちに、風葉氏は自分に非のあることを悟り、態度をがらりと變へて、

「これは私が惡かつた。伺つて見て間違つてゐたことがはつきり分りました。暴言は取消します。」と何のわだかまりもなく陳謝しました。すると、眼をむいて風葉氏を睨みつけてゐた辯護士は、急に笑ひ顔になり、

「さう分つて貰へれば、私はとても愉快です。まあ一杯やりませう。」

と酒が出て獻酬よろしく、大いに意氣投合したので、辯護士は風葉氏のためにいろ〳〵便宜をはかつてくれ、訴訟事件は、譯もなく解決してしまひました。

私は當時その話を聞き、心のかはり方のおもしろさを、しみ〴〵感じさせられました。これを結果から見れば、風葉氏は相手を自分の思ふとほりにした、ある意味でリードしたことになるのですが、しかし、そこまでになるには、日本海の海戰ではないが、百八十度の急廻轉をやつた爲めであります。

だから、この世に立つて行かうとするには、常に自分を反省して、その周圍と調和して行くことを心掛けなければなりません。

まづその第一歩として、自分をひどく嫌つてゐる人があつたら、それは、畢竟、自分がその人を嫌つてゐる心の鏡であることを悟り、その人を好きになるのです。誰でもよく〴〵見ると必ず良いところが發見されます。そこを摑んで、今まで嫌ひぬいてゐたとは反對に、好きになつて御覽なさい。その人は手の裏かへす如く、こちらに對して好感を有つやうに變つてしまひます。

私たちの身邊には、絶えず何かしら面倒な、心配になるやうな事件が起つて來ます。さういふ時は、深く自分の心を掘り下げて見なければなりません。自分の心

持ちに間違つたところはないか、自分のやり方にいけない點はないか。それをよく反省して、間違つたところがあれば急角度の廻轉をして、思ひ切りよく改めるのであります。改めたことから相手の氣持ちが變つて、すら〴〵と事件の解決してしまふことは、風葉氏の話で證明されて居ります。

目上の人は、自分の都合からのみ目下をリードする心になつてはならないやうに、一般の人が他を牽きつける道は、決して自分の「我」を立てず、いつ、いかなる時も自分を反省して見ることであります。

それだのに、自分のことは一切棚にあげて、人を恨んだり、人に不平を起したり、人につらく當つたりして、次第に世の中を狹めて行くなどは、何といふ愚かしいことでありませう。そんな人は、先づ棚に上げた「自分」をとりおろして、委細にしらべることです。決して他を見ないで、たゞ自分を反省する——、そこから境遇をぐん〴〵好轉する道が開けて行くのであります。

あらゆる物から教へられる

◇部長のカナリヤ買ひ

ある大會社の社長が、その會社の部長といふ地位にある人と、社長室で話してゐましたが、丁度話の終つた頃、社長あての郵便物を持つて小使がはひつて來ました。

社長は、

「デパートへ行つてカナリヤの番ひを買つて來てもらひたい。」

と命じ、料金はこれ〳〵、鳥はこんなのをと、細かに言ひ添へました。

それから一時間ばかりすると、先の部長が社長室へ現はれ、

「これで如何でせう。」

と、小鳥の這入つてゐる籠を出しました。それを見た社長は、

「これはなか〳〵いゝのを買つて來た。あの小使にしては目端が利いてゐる。」

と上機嫌です。すると部長は、

「イヤ、それを買つて來たのは私でございます。」

といふや、社長はひどく意外の面持ちで言ひました、

「ナニ、君が買つて來たつて？　これは驚いた。わしは小使に申しつけたのだが。」

社長としては、會社の重職にあつて多くの部下を使つてゐる男が、デパートへノコノコ出かけて行つて小鳥を買ひ、籠を提げて平然として歸つて來るとは、どうしても常識では考へられないことでした。

「君はこの會社の部長だね。その人に對し、社長が小鳥を買ひにやらせるものか、どうか。考へるまでもないことだとおもふが……。」

「小使にお言ひつけになつたのを、私のことだと早合點して申譯もありません。」

「謝らなくともよいが、使ひの性質を考へたら、誰に命令したものか分りさうなものだね。」

「私は社長さんの御命令である以上、その内容を吟味する必要はないと思つてゐます。會社の大事な調査をすることゝ、デパートに小鳥を買ひに行くことゝ、どちらが輕いか重いか、それは私共が考ふべきことではございません。社員は社長さんの手足でありますから、たゞ御命令に背かないやうに努力すればよいと思つて居ります。」

これは、大勢の社員を使つてゐるこの社長が始めて聞いた言葉でした。何といふ素直な男であらう。自分は、こんなにも善良な、忠實な社員のあることを今の今まで知らずにゐた。この男は社の寶だ――かう思つて、その買つて來たカナリヤを見直すと、柔かな胸毛をふるはし、頭を左右に動かして調子をとりながら朗かに鳴く樣は、たまらなく可愛いものでした。やはり誠實な人の買つて來たものは違ふ――かう考へますと、いつそカナリヤは、この男に飼はせるのが一番よいやうに思へて來ました。

「よく分つた。君の心持は實に有難い。では面倒ついでにこのカナリヤの飼ひ方を

君に賴みたいのだが、どうだらう。」

「かしこまりました。」

「簡單に引受けてくれたが、經驗があるのかね。」

「經驗はございません。しかし私にお命じ下されば、屹度御期待に副ふよう努力いたします。」

これで、何々部長兼カナリヤ飼養主任とい

ふことになつたのであります。

◇相手に教へられる

さて、それからのカナリヤはとても元氣で何の故障もなく、産卵も孵化もすべて順調に進み、いゝ子供がどん〳〵殖えて行つたさうですが、經驗がないのにどうしてそんな成績を擧げたのでせうか。

それは社長の命令である以上、全力をつくしてこれに當らなければならぬといふ決心をし、小鳥の本を讀んだり、鳥屋へ尋ねて行つたりして、できるだけの力を盡してゐるうちに、カナリヤが可愛くて堪らなくなつたさうです。さうすると、カナリヤがいろ〳〵教へてくれることに氣付いて、びつくりしたといふのでした。

例へば、カナリヤがお腹が空けば、お腹の空いたことを教へてくれ、水が呑みたければ呑みたいと教へてくれ、籠の中が汚なくて掃除がして欲しければ、さういふことも教へてくれるのです。カナリヤはその要求するところを、皆この人に分るやうにしてくれるため、素人でも樂にやつて行かれたといふのであります。

この話を聞いて、おもひ出されるのは、藤吉郎と言つた若い頃の秀吉が、ひどく痩せ衰へた「青」といふ馬を飼つたときのことであります。

秀吉は主人信長の命令だから、世にこれ以上の大切な仕事はないと思ひ込み、全身全力をあげてそれにあたりますと、「青」は秀吉にすべてを語り、すべてを教へてくれたのであります。次の一文はこの間の消息を明かにしてゐます。

「お早う、上天氣だな今日も——」

と挨拶した。この時に「青」が樂しい顏をするか、氣乘りのしない顏をするかを、彼は一目で見わけるのであつた。

「青」が前足で、床板を蹴つて、長い首を甘えるやうに竪にふりだすのは、いふまでもなく飼葉の催促であつた。

「待て〳〵、いま起きたばかりではないか。今やるぞ。」

と藤吉郎も伸びた調子で、「青」をたしなめながら手早く馬の朝飯を用意する。（中略）

そんな事をする間も、始終彼は馬と話をする。彼は人間に話すのと同じ心で「青」に語り、人間と同じ言葉で「青」から聞いた。「青」もまたよく藤吉郎の言葉を解し、聲なき言葉で自分の心を藤吉郎に傳へるのであつた。（矢田挿雲氏『太閤記』）

かうして馬に知識のない秀吉が、「青」を立派に仕上げることができて信長の信用を得、出世の第一階段を上ることゝなつたのであります。

◇松の葉にそゝぐ雨の音

天地は一切わが師なりと云ひます。見るもの、聞くもの、すべてが自分に何物かを教へてくれるのであります。禪家が木の葉の散るのを見て大悟一番し、劍士が瀧の落ちるさまを見て劍機を知つたといふやうな話は珍しくありませんが、どんな職業の人でも、その業に練達するには、仕事そのものから教へられるのであります。

山の芋を掘るには、そとに現れてゐる蔓から、芋のよしあしを教へられ、鰻つりは、泥土の樣子で鰻のゐるかゐないかを教へられるものだと云ひます。

私は曾て、出版物の校正刷りに向ひますと、誤植（活字を間違つて組みつけたこと）の活字が、おもしろいほど紙の上に飛びだして私の眼のなかに入り込むと言つたことがありますが、それは長年、倦むことなくこの仕事をやつて居りますと、活字の方でちゃんと教へてくれるのであります。

詩人の北原白秋氏は、ある年の梅雨の時に、雨の音を聞いて居りますと、だんだん心が澄んで來て、古池の面にふる雨、池のほとりの眞菰にふる雨、破れた垣根にふる雨、等々、ちがつた音をたてゝゐることが分りましたが、その中から、松の葉にふる雨の音ばかりを聽きわけようとして、遂にそれが出來たさうであります。

松の葉は、何の雜念もなく、しん〳〵と澄みわたつた詩人の「心の耳」に向つて、あなたの今求めてゐるものはこれだと、音高く教へてくれたのだらうと思ひます。

×　×　×

故後藤新平伯は、その晩年に少年團の團長として、例の團服を着け、いかにも愉快氣に少年の間に交つてゐました。永田秀次郎氏は、どんな心持でやつてゐられる

かを聞きますと、伯は、

「わしは、子供たちを自分の先生と思つてゐるのだよ。そして何でも子供から教はるやうに仕向けてゐる。」

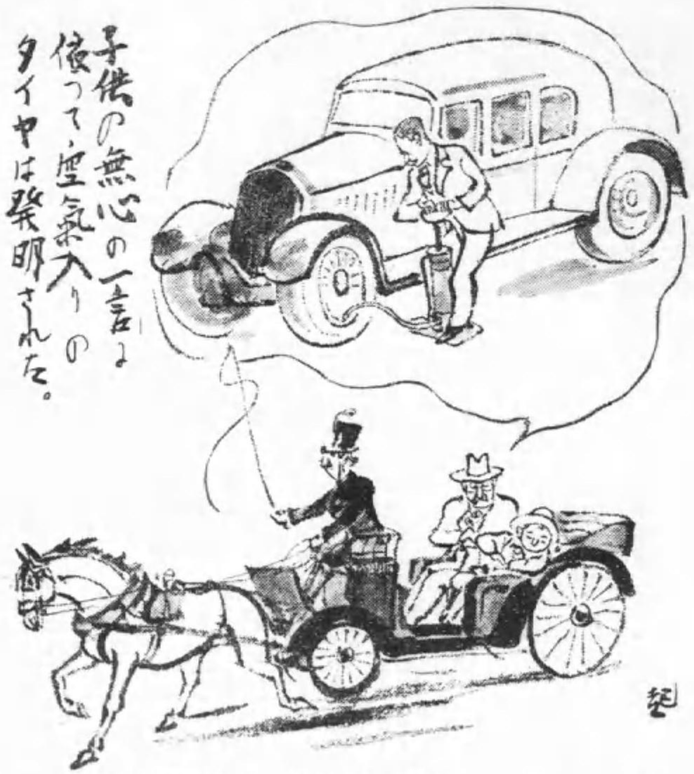
と云はれたさうです。當時、永田さんは東京市長でしたが、この一言に深い感銘を受け、

「市民を先生と考へて、教へられる心掛けでなくては、市長の仕事は出來るものではない。わしは伯の一言で東京市長學の大きなヒントを得た。」と語られました。

後藤伯ほどの人が、而も七十歳の高齢でありながら、少年から學ぶものを求めようとする心境なればこそ、いつも水々しく、若々しく、進歩的、積極的の政治家として、大きな存在だつたのであります。

◇發明はまごゝろの賜

獨逸のセネフエルダーが石版印刷術の發明を志したのは、父を喪つてひどく窮



乏してゐる時でしたが、どんなに失敗しても屈することなく、それをつゞけてゐました。

ある時、母から洗濯物の控へを書くやうに命ぜられたが、貧しいその家庭には筆墨の用意すらなかつたので、實驗に用ゐる石の上に研究用のインキで控へたのであります。ところが、數日を經てその石の面の文字を消さうとして、傍にあつ

た薄い硝酸の液で拭いたところ、文字は消えないで却つて石の面が腐蝕され、文字の部分はだん〳〵高くなつて來ました。彼は狂喜して飛びあがりました。これが長い間待ち望んでゐた「石版」だつたのであります。

彼のこの成功は、まるで偶然に得たものゝやうですが、決してそんなことはありません。セネフエルダーその人の一念、巖をも通すまごゝろが「天」に通じて與へられたものに外ならないのであります。

何かを書かうとして、石の表に研究用のインキを用ゐねばならなかつたほどの貧乏――それが發明の土臺になつたのですが、「天」は、彼をかうした有り難い境地に置いて、石の面はかくすれば腐蝕し、文字の部分はかくすれば高くなるといふことを教へて、石版の發明へ導いてくれたのであります。

發明の物語を讀むと、これに近い話に出會ふことは少くありません。「無」より「有」を掴みだすやうな發明は、對手の物から教へられなければ容易にできるものではありますまい。では、どうして教へられるのでせうか。――私達は、直感または

第一感といふ、閃くやうに走つてゆくものを、頭の中に感じさせられます。これによつて思ひもよらぬものを教へられ、又、忘れてゐたものを考へ出さして貰へるのであります。それは「天」からの大きな恵みでありますが、これを捉へるには、何事でも受け入れる素直な、へり下つた心持ちでなければなりません。その一例にかういふ話があります。

獸醫のダンロップ氏が、子供を連れて田舍の親戚を訪れる途中、その乘つてゐる舊式な鐵輪のがた馬車がひどく搖れるのを子供が不審がりますので、ゴム輪でないからだと說明しますと、子供は「ぢや、ゴムより軟かい、空氣みたいなもので輪を拵へたら、ちつともゆれないね。」とわけもなく言ひました。

ダンロップ氏は、笑つて聞いてゐるうちに、「これは馬鹿にならんぞ……」と眞顏になつて、「さうだ、ゴムの中に空氣を入れて見たら。」と氣がつきました。そして間もなく、空氣入りタイヤは世に送り出されたのであります。氏はこの發明によつて莫大の收入を得ましたが、この時もし、子供が何を云ふのかと相手にしなかつた

ら、かういふ大きな惠みは、氏の前を素通りして行つたに相違ありません。

こゝで、前に云つた某部長の社長に對する態度を振り返つてごらんなさい。およそ世の中にあれほど素直な心を有つてゐる人は果してあるでせうか。さらに命ぜられたことに對する緊張ぶりも、全く驚嘆するばかりです。あれではカナリヤから教へられたと同じやうに、會社の仕事をする場合は、仕事そのものから教へられて、かならず立派な成績を擧げることができる筈であります。

小使への命令を自分のことゝ思ひ込んでデパートへ行つた――、その事一つが、將來の大きな出世を會社から約束されたと言つて差支へないのであります。あれを以て愚直な男だと嘲り笑ふ人が、若しあつたら、それは人間榮達の眞の道を知らない、世にも氣の毒な人と言ふべきでありませう。

平生の用意と緊張

◇常陸山の鼻柱

力士が、立ちあがる機會を覘つて息をのみ唇をかみ、恐ろしい懸引きを含んだ眼で睨みあふ樣は、全く物凄い殺氣が迫つて來ます。而も、二つの巨體が猛然として立ちあがつたかと思ふと軍配が颯と空を切つて、萬事は終りますが、どちらの手かが、一方の隙間に喰ひ入る、その一秒を數十分したほどの短い間に、逸早くも機先を制した方が勝利を得たのであります。

その刹那の先手に出た方は、運がよかつたのだなどゝ云ふ人があらば、それは人間がいかにして群を抜いて進んで行くものであるかを、考へたことのない人に相違ありません。

ローマは一日にして成らずで、事の成功には、必ず遠因と近因とが伴つてゐます。この刹那の先手といふのは、土俵に相對した時、はじめて工夫し得たのでは決してなく、

「矢ぐら太鼓にふと目をさまし、明日はどの手でなげてやろ。」

と唄にあるやうに、朝、眼をひらいた時からの緻密な工夫、寸分のゆるみも見せぬほどの緊張に原因してゐるは勿論、更に溯つて、そも〳〵相撲道に入つてからこの方、平生に積み重ねて來た用意と緊張との現はれであるといつても過言ではないのであります。

彼等は平生、茶を飲むにも、飯をたべるにも、茶碗の持ち方、箸のにぎり方にすらも、相撲の手の工夫用意を忘れることなく、電車の釣革にぶらさがつてゐるときでも、四股をふみ、敵の隙間を覘ふ工夫を怠らぬ心組が、やがて本場所の一番勝負に、機先を制する力となるのであります。

明治の角界に雄視した常陸山に向つて、ある人が、

「どうして横綱までの修業をしたか。」

と聞きましたら、彼は顔をつき出して、

「おれの鼻を押へて見るがいゝ。」

といふので、不思議におもつて觸つて見ると、驚いたことには、鼻柱が挫けてゐたし、耳たぶもひしやげてしまつてゐたさうであります。彼が日の下開山と呼ばるるまでには、かういふ苦心が潜んでゐたのかとおもふと、誰しも頭が下らずにはゐられますまい。

×　×　×

人生は競爭場であり、また一大競技場でもありますが、凡そいかなる競技にも一番大事なのは、スタートを切ることであります。競馬は勿論、長距離競走など、すべてスタートを切る刹那に一寸でも遲れると、長いコースの間その取り返しに一方ならぬ骨が折れます。

しかし、そのスタートを切るときの機先を制する用意は、馬ならば調御、飼葉、

騎手の訓練、馬と騎手との寸分たがはぬ意氣の投合等、平生に數々の準備が要るのであります。

碁でも將棋でも、先んずれば人を制すで、いつも先手、先手と機先を制してゆかねばなりませんが、しかし、その場に臨んでの一時的緊張では、決して先手に出られるものではなく、一切の事みな相撲と同じやうに、平生の用意、平生の緊張が、いざといふ時の勝利となるのであります。

◇菊五郎の舞臺裝置

六代目菊五郎が先年、弟子の鯉三郎を連れて獵に行つた歸り途に、ある街道筋で、古風な田舍料理屋の前にさしかゝりました。すると俄かに足を留めてぢいつと瞶めたまゝ動かうとしません。

菊五郎は市中を自動車で走つてゐるときも、時々車をとめて中から瞬きもせずに何かを見てゐることがありますが、それは舞臺の上の參考になるものを見つけて、

頭のノートに書きとめて置くのであります。

いつも伴をして、さうしたことを見馴れてゐる鯉三郎は、また例のことだなと、默つて師匠の横に立つてゐますと、かれこれ十分もすぎてから、菊五郎はやつと緊張から放たれたものゝやうに莞爾して、

「おい、行かう。」と、とても機嫌よく歩きだしました。

それから二年ほど後に、長谷川伸氏の『一本刀土俵入』が菊五郎一座によつて上演され、非常に評判になりましたが、初日に、「我孫子宿の場」の料理屋の裝置を見た鯉三郎は、

おもはず「アッ、あれだ」と聲にだして感嘆しました。それは、曾て獵の歸りに街道筋で見た、あの家をモデルにしたものでありました。

舞臺裝置家が、序幕にだす料理屋をどんな風につくらうと頭を捻つてゐますと、菊五郎は極めて無雜作に、かく〳〵の恰好、かく〳〵の構へにするがよいと、その頭のノートをくりひろげて眼に見えるやうに說明しました。裝置家は感心して、その通りに作つたのですが、いかにも田舍の曖昧料理屋にふさはしく、非常に舞臺効果を收めたのであります。

菊五郎は言ふまでもなく現代獨步の名優。絕倫の技藝を以て人氣第一と云はれて居ります。この人にして尙ほこの用意、この緊張があるのかと思ふと、何人も嘆稱せずにはゐられますまい。

いかにすぐれた天稟に惠まれてゐても、それを生かすものは緊張と努力に外ならないことの、これは有り難い實物敎育であります。

◇生活全部のつながり

力士の土俵に於ける、俳優の舞臺に於ける、そのすぐれた成績は、平生の緊張の蓄積したものゝ現はれであることは、以上の話で明かになりましたが、それと共に生活全部の緊張が、さうならしめるものであることも、知つてゐなければなりません。

人は、自分のやつてゐる仕事、――學生ならば勉强、商人ならば商賣、官吏ならば官廳の、會社員ならば會社の仕事など、皆それ〴〵一生懸命になつて努めさへすれば、その外のことはどうでもよいかと言ふに、さうは行かないのであります。

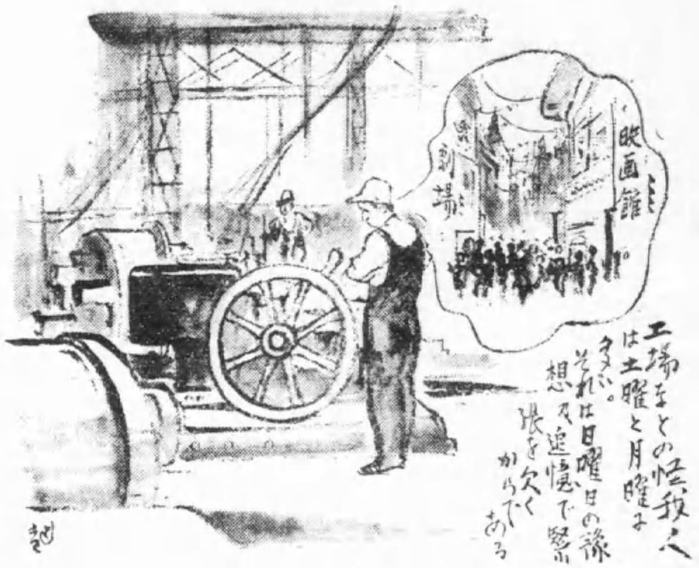
分りやすく云へば――、私の有つてゐる人生は、假りに一丈の長さで、その本分とする仕事は、一丈のうちの三尺だとします。すると三尺だけ緊張して努力すればよい、あとの七尺は――その中には、飲食もあれば睡眠もあり、さま〴〵の娛樂もありますが――どんなにだらしなくつても差支へないなどゝ思ふのは大きな間違ひ

であつて、一切が緊張してゐなければなりません。

人の生活は、その一つ〳〵が全部つながつてゐて、どこでも引張れば、すべてに影響を及ぼすことは、小石一つ池に投げると、小さな波が動き、それが全體にひろがつてゆくのと同じことです。だから立派な仕事は、その生活全部の緊張の結果に外ならないのであります。

昔の武士の中でも、特に士道を重んじた人々の日常生活の緊張ぶりは、實に大したものでした。毎朝、肌着や下帶は新しいものと取りかへ、いつどこで體を調べられても恥かしくないやうにして置く。厠で用をたすときは丸腰になるから、萬一の場合にと、ちやんと如意棒などを備へつける。夜は、灯のとり具合や刀の置き場所などを考へてから、枕に就く――こんな風でありました。

勿論、今日の世の中にそのまゝ當てはめられることではありませんが、私たちの生活は、どんな場合も緊張を缺いてはなりません。それは體をしやちこ張つてゐることではなく、遊ぶときは大いに遊ぶのも結構ですが、謂ゆる樂んで淫せずで、遊



びの中にも矩があつて、溺れるやうなことがあつてはならないのです。

例へば、碁打ちは親の死目に會はれないと昔から言つてゐますが、實に至言であります。人は娯樂に耽りだすと、仕事を忘れ、自分を忘れ、家庭を忘れ、今少しだ、イヤ今一番だと、あゝとを引いてゐるうちに、とう〳〵親の死目にも會へないことになるのであります。

それどころでなく、工場に働く人などは、緊張を忘れると、命にかゝはるほどの大怪我をすることさへありま

す。工場の怪我人は、大抵土曜と月曜の二日に出るさうですが、それは、土曜になると、あすの日曜には何をして遊ばうかと考へ込んだり、月曜には昨日の面白かつたことを思ひ出して、仕事も手につかず、ぼんやりしてゐるうちに、機械に巻き込まれたりして怪我をするのださうであります。

日曜は氣分を轉換して、明日から新たな元氣で働くための休みであるのに、その日曜のために却つて不幸を招くとしたら、私たちの生活は少しも緊張を緩めてはならないことを、痛感させられます。

◇謂ゆる名人氣質

私は以上のことを、『日の出』誌上で述べましたところ、ある讀者から、

「一切を緊張せよといふことですが、世の中には名人氣質といふのがあつて、だらしのない生活をしながら、立派な仕事をやつた人は少くないやうです。あれはどう解釋したらよいでせうか。」といふ質問を受けました。

なるほど、平生は、朝から酒を浴びてぐでん〳〵に酔ッぱらひ、年中借金で、細君を泣かしてをりながら、仕事にかゝれば、素晴らしいことをやつてのける人があります。それなら何も生活を緊張しなくてもよいやうに、一應はおもはれるかも知れませんが、しかしさういふ名人氣質の人たちが立派な仕事をやるのは、ほんの短い間だけであることを知らなければなりません。

名聲がさかんに鳴り響いたかと思ふと、間もなく消えて了つて音がなくなる――、私は明治から大正にかけて、さういふ幾人もの例を見てをります。或る文士、或る畫家など、一代の名流と言はれた人たちが、忽ち躓いて社會から葬られ、或は忘れられてしまふのは、だらしのない生活が、その健康と氣力を奪ひ、長く緊張した仕事を續けることができないやうにならしめるのであります。

だから生活全部を緊張しなければ、到底立派な仕事をつゞけることはできないといふ結論に、少しの狂ひもないことになりませう。臺所の水道の水は、どんな時でも、一たび栓をひねれば、間、髪をいれぬ早さで元氣よく迸り出ます。それは、

一日二十四時間の間、一秒だも油斷することなく、栓のところまで詰めかけてゐるからであります。

昔の武士は、夜、轡の音にも眼をさましたと言ひます。平生緊張してゐる人は、熟睡して居つてもコトリとした鼠の音に眼をさまし、盜難を免れたといふ話をよく聞かされますが、火事や地震などのとき、慌てず騒がず、咄嗟の間に應急の處置のできるのも、さういふ人たちであります。又、芝居や映畫を見てゐる時、或は夜中にふと眼を覺ました時、仕事の上などに思ひがけない素晴らしいことを氣づいたりするのも、それは平生の緊張の賜であることは、田舍の古料理屋で舞臺裝置のヒントを得た菊五郎の話でも證明ができるのであります。

己れを誇り飾る心

◇神風號と荒鷲隊の勇士

昨年の五月、朝日新聞の「神風號」が、歐亞をつなぐ南方コースの大飛行に、日本が始めて世界に誇る記錄を作つて歸つた時、盛んな歡迎の會に臨んだその若い二人の鳥人は、少しもえらさうな顏をせず、挨拶なども至極謙遜なものでした。更に同新聞社の人に聞いて見ますと、出發前と全然おなじ態度で、相變らずの眞面目な二人であると言ふのです。私は、これには深く感心してしまひました。

少年にして高科に上るは不幸也と、昔からよく言はれてをりますが、何が危險だといつて、年若くして大名を博するくらゐの危險はありますまい。それは、己れを誇る心が躓かせるのであります。そのよい例に、大正の中頃、一卷の小說を以て天

下を沸き立たせたS―といふ青年文士がありました。その時わづかに二十一歳、雨とそゝぐ稱讃の聲にすつかり有頂天になつて、傍若無人の振舞ひが多く、とう〳〵全新聞に叩きのめされて狂死しました。癲狂院に送られたときは二十六歳で、「神風號」の烏人の一人と同年なのも、S―を知ること深い私には、感慨無量だつたのであります。

今事變にあたり、最も華々しい手柄を立てゝ、全國民の重い信頼を受けてゐるものは、海陸の荒鷲隊であります。それが殆んど若い人たちばかりなのに、功に誇らうとする態度など微塵もないと言つて、會つた人たちは口を極めて讃嘆して居ります。海軍省軍事普及部の梅崎中佐は某空軍基地をたづねた時の感想の中に、

「これから爆撃に行かうといふ人たちは全く沈着そのもので、至つて物静かであるし、大手柄を立てゝ歸つて來ても、當りまへのことを當りまへにやつたといふだけで、少しも華やかな狀景などは見られなかつた。」

と言はれてゐますが、これなればこそ、死生の巷に出入して、あわてず騒がず、

悠々として大功を立てたのであらうと、私は昨年夏の「神風號」の感激を更に五倍し十倍したのであります。少しの事でも自慢せずに居れない自己吹聽屋は、顧みて恥づるところがなければなりません。

◇「天を相手にせよ」

仕事は他人のためにするのではなく、自己の本分を果すためにするものである以上、他人の思惑を考へたり、世間の人氣に媚びたりするのは、愚かなことであります。世間がいくら譽めそやしても自分の「五」の値打が、「十」になるものではなく、どこまで行つても、正味の自分に何の變りはありません。然るに世間から好く見られたい、えらく思はれたいとして、ひたすら自分を誇り、吹聽することは、何にもならないばかりでなく、そんな輕薄な心掛けでは到底立派な仕事のできやう筈はないのであります。

西郷南洲は、人を相手にせず、天を相手にせよと言ひましたが、まさに處世の大

道を喝破した言葉であります。

文化年間のこと、鎌倉の圓覺寺で山門を修築するとき、江戸深川の材木問屋白木屋の主人は、百兩の寄進を申出ましたところ、住職の誠拙和尚は、

「あゝさうか。」

と、たつた一口言つたゞけで、まるで他人事のやうな顔をしてゐます。そこで白木屋は和尚にむかひ、

「世捨て人の和尚さまには金の値打は分りますまいが、百兩といへば大金です。その大金の寄進に、あゝさうかではあんまり曲がなさすぎます。何とか御挨拶のしやうもありませうに。」

と、不足を述べますと、誠拙和尚は、

「お前さんが寄進をされると佛さんからたんまり功德を貰ひ受けるのだ。他人がうまいことをしてゐるのに、何もわしが禮をいふ筋はあるまいがな。」

といつて、大笑ひしたといふのであります。これは人を相手にせず天を相手にせ

よといふ言葉の註釋とも見るべき話であつて、世の賣名者、自慢屋に對する頂門の一針であります。

◇廣田外相の逸話

總理大臣をした人が平氣で、唯の大臣になるなどは、高橋是清翁以後にはあるまいと思つてゐました所一度首相だつた廣田弘毅氏は、近衞内閣に入つて外相の椅子についたのであります。

これは己れを飾らうとか、見識にかゝはるとか、世間的の名

聞に囚はれてゐる人には出來ないことであつて、氏は昔から、えらさうな顔をしたり、高ぶつたりすることなく、極めて謙讓の人だつたと聞きました。

曾て駐露大使時代、賜暇歸朝されたとき、東京驛のホームを埋めた出迎への名士大官の中に、杉山茂丸翁もをられました。氏が青雲の志を抱いて上京したころ、書生として翁の世話になつたことがあるのであります。廣田氏は、出迎への人々へ一わたり挨拶を濟ましたあと、つか〳〵と杉山翁のそばへすゝみ寄り、翁の持つてゐる折カバンをもらひ受け、翁に隨いて驛の出口まで行つて、そこで自動車に乘る翁を見送られましたが、それは、當り前のことをやつたといふ風で、少しの不自然さもなかつたさうであります。

この有りがたい話のなかに、廣田氏の全貌が浮きでゝ、その內閣入りの氣持ちも朧げながら分るし、氏が今日の地位を築きあげた土臺は、これだらうとさへ思はれるのであります。

己れを誇り飾る心の微塵もない話――極暑のとき、涼風に顏を撫でられるやうな

爽かさを覺えます。

◇掛値のない正味の自分

三菱とか三井とかの本店支店にゐて手腕を揮つたとか、滿鐵の本社または出張所にゐて、名聲を馳せたとか、――さういふ大どころでなくとも、相當の舞臺で働いてゐた人が、職に離れ、生活難に陷つて、もがき苦しんでゐる話を聞かされもすれば、又見ても居ります。

かういふ人たちの多くは、日本有數の會社の大看板を背景にしてゐればこそ、その才能を現はし、手腕を揮ひ得たのであります。而もその才能手腕といふものも、引き上げられて高い地位にのぼり、そこで仕事の呼吸をおぼえ、コツも呑み込んでから獲られたものに外なりません。

それを一切自分ひとりの力と自惚れ、いつまでも人に使はれて月給生活をしてゐるのは馬鹿の骨頂だ。こゝを出て獨立して働けば、儲けは丸どりで思ふまゝのこと

ができると、飛んだ慢心を起し、長い間勤めたところを離れて見ると、羽衣を奪られた天人同様、手も足も出なくなり、急轉直下して生活難に惱むやうにさへなるのであります。

新聞記者が、要路の大官を訪ねて、「君が」、「僕が」で話をするやうになると、自分も天晴れ大名士になつた氣持で肩で風を切つてゐたのが、社をやめてから行くと、玄關拂ひを喰はされて人情の輕薄を憤慨したといふ話を屢々聞かされます。新聞記者が優遇されるのは、個人ではなく、何々新聞といふ肩書そのものであります。肩書がとれると、最早何の用事もなくなるのは當然でありませう。

ソクラテスは「汝自身を知れ」と申しました。私はこの聖句の下に「これ一切を知るにまされり」といふ言葉を附け加へたいとおもひます。本當の自分を知ることのむづかしさは、古今その嘆を一にするところであつて、私たちの眼は、あらゆるものを見ることができますが、たゞ一つ、掛値のない正味の自分の姿を見ようとすると、眼は曇つていろ〳〵の錯覺を起すのであります。

その眼を曇らせるものとは、慢心であります。かなり聰明な人でも、いざ自分のことになると、をかしいほど自惚れて、思ひ上つた態度をとるものであります。

昔、つむじ風に吹きあげられて、偶然、高い塔の上へ昇つた男が、下を瞰おろして、「みんな蟲のやうに小ッぽけではないか。」などゝ言つて得意になつてゐるうちに、欄干から足を辷らして、眞逆さまに墜ちて片輪になつ

たといふ寓話がありました。

この話を聞く人は、何といふ馬鹿者だと言つて笑ふことでせう。ところが、その笑ふ人たちも、大抵は同じやうな錯覚を起してゐる仲間であります。大勢の人が椅子に腰を掛けてゐる中で、自分だけ官廳、會社、新聞社などさま〳〵の高い臺の上に立つて、えらさうに振舞ふ人のいかに多いことでありませう。

さういふ人達は、足場としてゐるその高い臺から振り落されて、やつと慢心の鼻が折れたのでは、もう手遅れで、多くは、どうにもならない狀態に追ひつめられて了ひます。地位の高下や月給の多寡で人間の値打が決るものではありません。自分の仕事を天職と信じて懸命に働く人こそ、どんなに地位が低くともえらいのであります。

◇ある會社の重役との問答

曾てある溫泉で舊友と落ちあひ、その連の、大きな會社の重役である人と三人、

晩餐を共にした時、友人と重役との間に、こんな問答が交はされました。

「いつかお願ひして、君の會社の厄介になつてゐるT君は、もうだいぶになるが、課長あたりへ引き上げて貰へないかな。」

「あれは頭もいゝし、手腕もあるが、たゞ一つの缺點は自慢屋でね。同僚や部下に威張るため、人氣はどうもよくないよ。」

「ホオ、それは初耳だ。」

「例へば、自分の目下の者に、君のやり方は丸でなつてゐないと、ひどくやッつけて、俺ならかうすると自慢の講釋を長々しくやるのだ。すると目下の連中は、僕たちの何倍といふ月給をとつてゐるんだから、ちつとくらゐ出來るのは當り前だなんて、蔭口を叩く始末でね。」

「それは困るな。」

「その上、社外の人とよく飲むので、安心して拔擢されないのだよ。」

「どうして社外の人と飲むのがいけないんだね。」

「自慢屋といふやつは、飲むと一層自慢がひどくなるものだよ。會社でかく〳〵の事件の時、僕はかういふ處置をとつたとか、かうして巧くやつたとか、いゝ氣持ちになつて、べら〳〵手柄話をやるので、會社の内情が外に洩れてしまふからね。」

「T君はそんな自慢屋なのかね。君は又それがよく分るんだな。」

「私は倶樂部で碁など打つてヒマさうにしてゐるが、社員のことは隅から隅まで、小使の嘴アの買ひ喰ひの癖までちやんと知りぬいてゐるよ。T君の行狀記などは何でもないことさ。」

「重役だけは、そんなに自慢してもいゝのかね。」

「ヤア、一本やられた、ハッハッハッ。」

と、三人聲をそろへて大笑ひになりました。

しかし、これは笑つてばかりゐられないことであります。頭もあり手腕もありながら、自慢のために進路を塞がれるなどは、あまりに馬鹿々々しいことですが、これに類する話は定めて世間に多いだらうと思ひます。

わが荒鷲隊の勇士たちが、全日本の感謝に値ひする偉功を樹てながら、當り前のことを當り前にやつただけだといふ顏をしてゐることを思つたら、尋常一樣の事を、誇り、飾り、吹聽したがる人は、慚死しなければなりますまい。結局は、「人を相手にせず、天を相手にせよ。」でありますが、私は更にその意味から、

「人を相手にせず、仕事を相手にせよ。」

といふ言葉を座右の銘にしてもらひたいと思ふのであります。

嫌ひな仕事が好きになる

◇裁縫ぎらひの娘さん

このほど私の知人の奥さんが見えられて、娘がもうそろ〳〵嫁に行く年頃なのに、裁縫が嫌ひで、どうしてもやる氣になりませんから、一度話をしていたゞきたいといふ頼みでありました。

ではお會ひしませうと引受けると、間もなくその娘さんが來られました。やつと二十ぐらゐで、派手な顔立のなかに少しとげ〳〵しい感じのする人でした。

「あなたは裁縫が嫌ひださうですね。」

と言ひますと、

「嫌ひぢやないんですけど、何しろ肩が凝りますので。」

と、少し苦笑しながら答へるのでした。

「厭や〳〵なさるから肩が凝るのですよ。好きになつて御覽なさい、肩など凝るものではありません。肩が凝ると言つて按摩をとる人がありますが、叩けば叩くほど却つてひどく凝るものです。そんなことをするより素直で朗かな心になれば、體がすうと樂になりますよ。」

「でも、厭なものが好きになれませうか。よく蟲が好かないと言ひますが、性にあはないものは仕方ないと思ひますわ。」

娘さん、なか〳〵突込んできます。

「それは喰はず嫌ひですよ。やつて見れば面白くなるのに、やらないで厭がるのは間違ひですね。裁縫は婦人として好きとか嫌ひとか言つてゐられるものぢやありませんから、思ひきつておやりになることです。」

「私も一寸やつては見ましたが、どうしても好きになれませんので……」

「それはいけません。少しばかりやつて見て、出來ないから駄目だと決めるのは、

我がまゝといふものです。御參考に私の體驗をお話しませう……

私は鄉里で高等小學校を出ると、師範學校へ入ることになりましたが、入學試驗のなかで最もやかましいのは數學だと聞き、これは到底駄目だ、斷念するより外ないと悲觀してしまひました。私は數學が大嫌ひで、お話にならないほど出來なかつたからであります。

しかし、家庭の事情は中學校に入ることを許しませんので、縣の費用でやつてもらへる師範學校以外に、學問の途はありません。これは嫌ひだなどゝ言つてゐられる場合でない。腹をきめて數學を勉强しようと思ひかへして、昔の田舍のことですから、『算術五百題』といつた問題集を一冊やつとのことで手に入れ、それを賴りに獨學したのであります。

はじめのうちは、どうしても出來ないので、失望のあまり、その本を壁に拋げつけたこともありましたが、氣を短くしてはいけないと自分で自分に言ひ聞かせて、またコツ〳〵やつてゐるうちに、一題二題と答が合ふやうになりました。絲口が開

けだすと、始めて面白味を感じて來ます。

さうなればもう占めたもので、それからは順風に帆をあげるやうな調子で、自分ながら驚くほどの進み方でした。『五百題』全部が完全にできあがつたときは、世の中に數學ほど面白いものはないとさへおもひ、夜が明けたやうな心地がしました。

これは、私が十五歳から

十六歳にかけての體驗でありますが、それを通して私の掴んだものは、

世の中に厭やなものはない、たゞ味はないだけだ。

世の中に出來ないものはない、たゞやらないだけだ。

といふ二つであります。世間へ出てから、ずゐぶん嫌ひなものに出逢ひましたが、いつも、この體驗をおもひ出し、自分を鞭うつて來たのであります。

さういふ私ですから、食はず嫌ひはいけないと、しんから云へるのです。あなたも直きにお嫁に行かれるでせうが、家庭をおもちになる以上、厭でも應でも裁縫の心得がなければなりません。女學校時代からずうつと裁縫は嫌ひだと言つて通した人が、お嫁に行つてからひどく困つたといふ話をよく聞かされます。女中が一寸したものを縫つて、奥さんこゝはどうしたらいゝでせうかと尋ねられても、返事ができないで赤面したといふやうな話も少くありますまい。

現にこの間の新聞に、夫から裁縫のできないのは妻の資格がないと叱られ、毒を飲んで死んだといふ婦人のことが出てゐました。これは極端な例ですが、裁縫が嫌

ひだと言つて澄してゐられないことは、お分りになられたでせう。では早速おやりになるんですね。」

◇食べ物の好き嫌ひ

そんなことを言つてから、話題を一轉して、

「あなたは、ずゐぶん食べ物の好き嫌ひがひどいでせうね。」

と言ひますと、娘さんはびつくりして、

「マア、母はそんなことまで申しましたか。」と眼をみはりますので、

「お母さんからは何も聞きませんが、ちやんと分るのですよ。裁縫のきらひだといふほどの人が、食べものを何でも受け入れる筈はありませんからね。食べものばかりでなく、人に對しても、きつと好き嫌ひはひどい筈です。それは一つ頭からでゝくる心持ですから、事に觸れ物に應じて同じやうに働くのです。

そんなことでは世の中がせまくなるばかりで、決して幸福な生活はできませんか

ら、さういふへんくつな考へを破つてしまはなければなりません。只今私の言つた通り、世の中に厭なものはない、たゞ味はないだけだと悟られて、まづ嫌ひな食べ物を片つぱしから食べて御覽になることです。あらゆる食物は、人を活かすために天から與へられたものだと感謝しながら箸をとりますと、本當の味がわかるので、みんな旨しく食べられます。こんな旨しいものを、どうして今まで食べなかつたらうと寧ろ不思議に思ふくらゐになりませう。

一切のものを受け容れるといふ、豐かな氣持ちになつて、人は始めて肉體も、そして精神も健康になるのです。朝日新聞で昨年の春、全國から選拔した健康兒が、殆ど例外なく皆食べものゝ好き嫌ひがないといふのは、實に面白いことだと思ひました。あなたも、あれが嫌ひだ、これは厭だなどゝいふ心持ちを、今日かぎり、さらりとお棄てになるんですね。氣持ちがさうなつてから裁縫をなさると、針の運びがおもしろく、肩が凝るやうなことは絶對にありませんよ。」

娘さんは、話が終りに近づくころから、はじめの少々蓮葉な調子は消えて、まじ

めに聞いてゐましたが、やがて慇懃に頭を下げ、禮を言つて歸りました。

◇太刀山と吉右衛門

元横綱の太刀山は、昨年の二月に行はれたその還暦祝賀會の餘興に、横綱土俵入りの型をやつて、老來なほ素晴しい元氣なところを見せましたが、あれだけの大力士でも、始めは相撲取りになるのがいやだ〳〵と言つて、嫌ひぬいたのでした。

彼が青年の頃、途方もない大力であることが鄕里の新聞に出たのを見た板垣退助伯（大へんな相撲好きで、國技館と命名したのもこの人）はひどく喜んで、早速その男を上京させるよう、時の內務大臣西鄕從道侯から富山縣知事に命令してもらひました。併し、彼は相撲とりだけは御免を蒙りますといつてかぶりを振るのを、知事は

「君が上京してくれなければ、私は上官の命令にそむいたことになる。とにかく、體を見せるだけでよいから是非行つてくれ。」

といつて無理やりに東京へ連れてゆきました。板垣伯は彼の體を見てすつかり惚

れこみ、しきりに相撲になるやうにすゝめましたが、どうしても聞き入れません。伯は相撲の立派な國技であることから、當時の角界の内情は彼に奮起して貰はなければならぬわけを諄々と説きましたので、彼は斷る言葉に窮し、とう〳〵承知してしまひました。

さて力士になつた以上、もはや好き嫌ひなどをいつてはゐられません。伯に對する知己の情からも立派なものにならなければ濟まないと、天性の負けじ魂をふるひ起こして、猛稽古をはじめました。元來の大力は、この猛稽古によつて無双の强さを發揮し、ぐん〳〵先輩を乗りこして忽ち幕の内に入り、遂に横綱で頑張ること七ヶ年に及び、天下無敵を以て稱されました。

もし彼が、相撲に對してどこまでも「食はず嫌ひ」を突ッ張つてゐたら、富山縣のなにがし村に、大飯くらひの馬鹿力ある百姓として評判されたゞけで終つたかも知れません。人は運命だ――と言ひますが、結局は決心と努力であることを今更のやうに思はせられます。（次頁のさし絵右は板垣伯）

俳優の中村吉右衛門は、小さい時分は芝居がいやで〳〵たまらず、繪かきになりたいと駄々をこねて、父の歌六をてこずらしたさうであります。位置の高い俳優の子弟は、小さいうちに初舞臺を踏むことを例としてゐますが、彼はどうしても言ふことを聞かず、小傳次等が子供芝居の一團を組織したとき、ひきずられてやつと舞臺へ立ちましたが、非常な評判となつたので當人もおもしろくなり、それか

ら熱心な稽古を積んで、とう〳〵今日の位置になる土臺を築きあげたといふことであります。

時代劇では隨いて行ける人がないといはれるこの名優に、芝居を厭がつた逸話のあることは、面白いと思ひます。

◇仕事を好きになれ

就職期になると、學校を出た若い人たちは、會社や商店や官廳などへ、それぞれ入つて行くのですが、さて與へられた仕事を見ると、學校で詰め込んだ理論などとは凡そ緣の遠い、平俗きはまるものなのにがつかりしたと、よく聞かされます。

これなどは心得違ひの甚しいもので、さういふ平俗だとおもはれる仕事が、その會社なり商店なりの根や幹を培つてゆく大事な養分になるのであります。さう思つてどんな仕事でも好きにならなければなりません。學校で勝手な熱をあげてゐたときと違ひ、實社會に出ると、骨の折れること、面倒なこと、さま〳〵でせうが、

それを厭がるやうな人は、前途に見込みはないのであります。厭な仕事ならば、まづ勇敢に飛び込むことです。そしてその仕事に沒頭してゐるうちに、仕事そのものが不思議な味ひを生みだして、仕事がおもしろくて堪らないやうにしてくれます。誰かゞ身を立て家を興すには、女房を好きになるのが第一といひましたが、同樣に大事なのは自分の仕事が好きで堪らなくなることです。

百貨店の創始者であるジョン・ワナメーカーは、

「最後の勝利はその職業を心から好むものゝ手に握られる。」

と云ひましたが、遠いこの米國の實業家の言葉を借りるまでもなく、皆さんの入つて居られる會社や商店の社長さんの經歷をしらべて御覽なさい。サラリイマン時代に、殆んど例外なく、仕事に夢中だつた人に相違ありません。

一時、關西財界の大御所とまで謳はれた岩下清周氏は、三井物產の平社員時代、必ず他の人より一時間も一時間半も早く出社して仕事にかゝる準備をしてゐましたが、それを認めた重役の益田孝氏から、これはたゞの青年ではない、將來きつと物

になる――と折紙をつけられ、出世の絲口がひらけたのであります。

又、最近二千萬圓に增資した日本特殊鋼管會社の中島專務は、泰東同文局といふ支那向きの輸出業專門の會社の一サラリイマンだつた頃、毎日、夜の八九時までも唯だ一人居殘つて仕事の整理に沒頭したばかりでなく、發送部の人たちは退出時間が來ると、荷づくりのできた荷物をそのまゝ打棄つて行つてしまふので、氏は歸りにそれを擔いで運送店まで持つて行くのを例としたさうであります。一時も早く先方の手に渡らせたいばかりに、賴まれもせぬ仕事に骨を折つたのでした。

これ等の人たちは、上役に認めてもらふといふやうなさもしい考へから、さうしたのではなく、その職に忠實なあまり仕事が好きになつて、さうせずにゐられなかつたのであります。が、いくら認めてもらふといふ考へがなくとも、上役は認めずにゐません。もし上役が認めなければ神は必ず認めます。中島氏が最近、砂鐵製錬といふ國策上極めて重要な仕事をする大會社の事實上の獨裁者となつた、その輝かしい成功は、決して偶然でないことが分るのであります。

若い人たちは、深くこゝに鑑みて、何よりも仕事の好きな人、その仕事をさせてくれる會社なり商店なりを心から愛して、魂をうち込める人にならなければなりません。やつと職業を得たばかりで、好きとか嫌ひとかわがまゝを言ふのは、實に勿體ない話で、心得違ひの甚だしいことであります。

癇癪の蟲を封じる

◇怒つて黒星

昨年春場所の大相撲の中で、五日目の金湊と名寄岩の取組みは、どちらもその日まで土つかずだつたので、滿場の人氣を背負つた兩力士の緊張ぶりは、一段でありました。

名寄岩はひどい癇癪もちださうです。それを承知の金湊は、氣合ひの未だ熟さないうちに、「やッ」と立上りざま、名寄の肩を強く突き飛ばして、土俵の下まで轉がり落しました。怒氣心頭を衝いた名寄は、憤然として取組みました。まるで喧嘩相撲のやうな激しさで、名寄は二度までも金湊の顏に猛烈な張り手を呉れましたが、それがために體勢を損ひ、結局負けてしまひました。

翌日の新聞にこの取組みの記事が載つてゐましたが、「怒つた名寄は黒星」といふ題目に私の興味はそゝられました。そして嘗て、横綱大錦と陣立との取組みを憶ひだしたのであります。これも機の熟さないうちに、陣立が突然、錦の兩足をとり、東溜りに眞逆様に投げ込んだのですが、錦は悠々起きあがつて砂を拂ひ、土俵にのぼつて來た時、何事もなかつたやうな平氣さで、顏に微笑さへ浮べて居りました。そして簡單に相手を一捻りに捻り仆しましたが、さすがは横綱の心境と、當時敬服したのであります。

これは相撲ばかりでなく、碁や將棋など、よく相手をからかつたり、厭がらせを言つたりします。言はれた方が釣り込まれて癇癪を起すと、名寄岩同樣、マンマと敵の作戰に嵌り込まなければなりません。勝つも負けるも、技倆の外には、心境一つで決まります。

それが一層端的にあらはれるものは、劍道でせう。おなじみの『大菩薩峠』の机龍之助が、武藏太郎の名刀を青眼に構へたまゝ、わが刀に相手の刀を聊かも觸れさ

せず、いつ迄もぢいッとしてゐる、得意の「音無し」でやられると、みな焦れだして、兩の小鬢のあたりに脂汗がにじみ、癇癪筋が額に動きだします。この時いらつて打ち込んで行くが最後、血に喘ぐ武藏太郎の鋭い切れ味を喫しなければなりません。劍と禪は一致すると言ひますが、結局心の平靜であるか何うかによつてその一切は決します。

談判や交渉事などの場合、どうしても癇癪を起さぬ人があります。向ッ腹を立てたり、いらついたりする人がそれに對しますと、まるで音無しの構へに抑へつけられるやうに心境負けがして、手も足も出なくなるのであります。

秀吉が藤吉郎時代、何か獻策すると、信長は、出過者の猿めと口汚く叱りつけましたが、元氣で朗かで、而も主人おもひの秀吉は、たゞの一度も怒つた顏などしませんでした。信長は次第に秀吉が好きになり、秀吉に心を牽かれて行きました。信長は心境に於て秀吉に負けたのであります。

今日高い地位に立つてゐる人たちの經歷をしらべたら、その出世の途中に於いて

屢々これに類した話を發見するに相違ありません。學識才幹兼ね備はりながら、志を得ないで不遇を嘆いてゐる人は、大抵は右の反對の、癇癪が禍をなしてゐる場合が多かつたことゝ思ひます。

◇癇癪は人を殺す

ひどい癇癪は、人の命を絶つことさへあります。

私がまだ鄕里にゐた十四五歲の頃、東京何々團と稱する、實は田舍まはりの芝居がかゝりました。初日に忠臣藏

を出しましたが、例の殿中刄傷の場で、師直が判官を侮辱しだした時、私はふと横の方を見ると、四十前後の男が、血走つた眼を瞬きもせずに師直を睨んでゐます。師直がだん〳〵傍若無人ぶりを發揮すると、その男の憤慨が高まり、蒼白になつた顏から殺氣が迸つてゐるので、私はひどく氣になり、絶えず見てゐました。いよ〳〵判官が師直に斬りつける、あの高潮した場面になつた刹那、例の男はアッと一聲叫んで、口から鮮血を吐いて、ひつくり返りました。場内は大へんな騒ぎでしたが、家へ運ぶひまもなく、そこで息は絶えてしまひました。

ひどい癇癪を起せば、人は死ぬことがある——といふ事實を、私はまざ〳〵と眼の前に見たのであります。何といふ恐ろしいことでせう。その男は、病氣を持つてゐたかも知れません。而も死期を早めたものは、はげしい癇癪であること、もとより疑ふ餘地がないのであります。

これは極端な例ですが、平常、この癇癪のために人はどんなに健康を害されてゐることでせう。心が明るく朗かな時は、胃の運動は活潑なので何を食べても甘く、

元氣で働かれますが、その反對に癇癪がむら〳〵と湧いて來ると、胃痙攣や下痢などの起ることは、何人も知るところであります。

血壓の高くなることは、腦溢血の原因だといつて恐れられてゐますが、癇癪を起した時は、體を動かさなくとも、血壓のどん〳〵高まつて行くことは、醫學上すでに實驗濟みであることを知らなければなりません。

◇婦人の癇癪

婦人にあつては泣くのが、一種の癇癪であります。婦人は物事が思ふやうにならないからと言つて、男のやうに亂暴なまねをして、派手に感情を破裂させるわけに行きません。そこで女の武器であるところの涙をこぼします。口惜しいといつては泣き、情ないといつては泣く。その泣く樣は、雨に惱む海棠のやうだなどゝ風情ありげに言はれてゐますが、實は癇癪の一種に外ならないのであります。なぜかと云ふに、怒るのも泣くのも共に、思ふやうにならないところから出る「不足心」だか

らであります。

この悲哀の情が起りますと、唾液や、胃液や、腸液や、汗、尿など、すべての分泌が減少し、烈しくなれば、涙が殆ど出ないくらゐになつてしまひます。よく、

「泣くにも最早涙がない。」

「涙腺が涸れてしまつた。」

などゝ言ひますが、それは決して誇張した形容ではありません。ある美容師は、

「どんなに化粧の秘術をつくしても、心に悲しみを有つてゐる婦人の皮膚をきれいにすることは出來ない。」

と言ひましたが、まさにその通りでありませう。どんな麗人でも、癇癪を起して直ぐ柳眉を逆立てたり、ヒステリーで不平ばかり列べたりしては、折角の美貌も臺なしになつてしまひます。波も風も立たない平和なこゝろであつて、その美は一層輝くし、又、醜くても人を牽きつける和かさが湧いてくるのであります。東京市中で婦人の使ふ化粧品代は一ケ年約三千四百五十萬圓だと聞きました。この數字は婦

人がきれいにならうとする、恐ろしいまでの欲求を語つてゐますが、しかし美容の根本となるものは、心の平和であることを知らなければなりません。

◇腹の蟲封じのお呪ひ

某會社に入つてゐる知人の息子が、先日、平生よく小言ばかりいふ課長と、ふとしたことから言ひ合ひをして、「誰がこんな會社にゐるもんか」と辭職屆を叩きつけて出たのであります。さて一晩寢て翌朝になつて考へて見ると、「しまつたことをした。あんな良い會社は外に二つとありやしない。」と氣がつき、早速あやまりに行つたのですが、後悔あとの祭り、もう駄目でありました。

その青年が私のところへ來て、「私もそれほど癇癪もちではありませんが、その日の蟲のゐどころが惡かつたでせう。」と言ふのです。

さう聞くと、惡いのは蟲で、當人には一向責任がないやうに思はれて少々ムシのよすぎる話でありますが、兎に角この蟲は實に厄介物です。ひどくあばれだすと、

人間一生の運命を葬つてしまふ場合さへあります。

神經質な子供が、幾晩も幾晩も泣いて寢つかないことがありますと、この子は蟲を起したのだといつて、『蟲封じ』のお呪ひをすることは、東京も地方も變りがないやうであります。しかし單に子供ばかりでなく、大人こそ大にやつて貰はなければなりません。それは、癇癪の蟲が勝手にあばれださないよう、しつかり封じこめてしまふのですが、そのお呪ひは、

「どんな場合にも感情に走らない。」

といふのです。これを、氣のついた時は、いつでも心の中で繰り返しますと、効果はてきめん、頭の血がすうと下つて癇癪の蟲はおとなしくなります。殊に談判、交渉事の場合、このお呪ひを唱へてから對手に會ふ用意が必要であります。

癇癪は、つまり感情に囚はれるから起るのであります。世の中の一切が自分の思ふやうになつてくれたら、さぞ結構でせうが、さうならないので、腹が立つたり悲しくなつたりするのであります。しかし、それが人生のすがただ、世の中はさういふものだと、はつきりわかつたら、不足心は出なくなる筈です。雨も自分の都合のよい時ばかり降らせたい、雪もスキーをやる時だけ降つてくれたら具合がよいだらう、などゝ思つても、さうは行きません。それが人生だとはつきり分つて見れば、雨が降つては困る時に降られても、又、雪が少くてスキーが十分やれなくても、不平をいふ氣にはなれなくなります。商賣が思ふやうに行かなくても癇癪を起さず、自分の努力が足りないからだと反省して見る氣になりませう。

これが心の廣い人であつて、海が流れ來る一切のものを呑み込んで知らぬ顏をしてゐるやうなものです。小さな石を一つ、海に投げつけても、そんなものは何處に何うなつたのか、てんで問題になりませんが、その小石をコップの中に落すと、波が騷ぎ立つて暫らくは靜まりません。一寸したことに感情を動かし神經を尖らすのは、小石一つで波が騷ぐやうなもので、コップ程度の價値しかない人物であります。海のやうに心の廣い人――、さうなることはもとより容易ではありませんが、私たちの修養の目標はそこに置かなければなりません。

◇退一歩の工夫

この頃の軍艦にはないさうですが、前には、發射して來た敵の水雷をフハリと受けとめて爆發させないために、軍艦の外部に水雷網といふ裝置があつたさうです。相手の癇癪に酬いるに、こちらの癇癪を以てしては大騒ぎになるばかりですが、フハリと柔かに受けられると、柔よく剛を制すで、癇癪も消えてしまはなければなりません。癇癪持ちの上役を有つた人など、このフハリと受ける工夫が殊に大事であつて、それにより出世の道も拓けてゆきますが、それができないと、私の知人の息子のやうに、折角得た地位を棒に振つてしまふことになります。

また癇癪の蟲が起きたら、一歩退つて自分を客觀するのも面白いと思ひます。忠臣藏の芝居を見て、師直が憎くて〳〵たまらないとき、一分の餘裕があつて、ふと自分の姿を見ますと、たかゞ芝居なのに肩を怒らして今にも掴みかゝらうとしてゐる自分が淺ましくもなり、馬鹿らしくもなりませう。さうなつたら熱しきつた頭

に冷水を浴せかけられた氣がして、その刹那に癇癪の蟲はどこかへ行つてしまふに相違ありません。私はこれを退一歩の工夫と申します。

佐久間象山は、常に鏡を懷中に入れて、人が、嘘やでたらめを言つたとき、「どんな顔をしてさういふことをいふか、よく見るがいゝ。」

と言つて、鏡を出したさうですが、私たちも癇癪を起した時は、鏡を出すまでもなく、自分で自分の顔を想像すると、神經の硬張つた、眼に和かさの消えた、不快な顔が浮んで來て、こ

れはいけないと氣持を轉換せずにはゐられなくなります。

又、腹を立てたとき、それを口に出すのは、一晩寢てからにすると決めてゐる人もあります。一時の感情でカアッとなつたのは、一晩ぐつすり寢て眼を開いた時は、もう忘れてしまふこともあるでせうし、又、思ひだしたところで、馬鹿々々しくて二度と取りあげられず、そのまゝ打ち棄てるやうになつたりしませう。

×　×　×

政黨政治家として日本にタツタ一人の傑物といはれる原敬氏が、明治二十三年、一等書記官としてフランス公使館に居ました時、急命に接して歸朝しました。ところが氏を呼び返したのは外務省ではなく、時の農相井上馨伯であることが分り、變だと思ひながら伯を訪ねますと、

「わが輩が今度農商務大臣となつたので、君を祕書官にしたいと思ひ、呼び戻したのぢや。そのつもりで居てくれたまへ。」

と、こちらの意嚮など少しも考へず、勝手に決めてしまふその高壓的態度を見る

と、生れつきの剛情我慢がむら〳〵と出かゝつたとき、兼ねてからの母の訓戒をフト思ひだし、

「いづれ熟考の上、お答へいたしませう。」

と云つて引き下りました。その母の訓戒といふのは、

「お前のその剛情はどんな失敗を招くかも知れぬから、何でもぢつと辛抱しなければならぬ。この辛抱するといふことを一生忘れぬように。」

といふのでありました。で、その翌朝、頭が平靜になつてから考へて見ますと、自分をわざ〳〵フランスから呼び戻したのも、自分を認めてくれゝばこそだから、腹を立つては申譯がない、よろしく知己の恩に酬ふべきだと、早速井上農相に快諾の旨を申し入れました。

井上伯は、明治の元勳、政界の大立物です。原氏がこの人に深く知られて、榮達のスピードを速めたことは、言ふまでもありません。原氏は過ぎ去つた跡を顧みて、やつぱりあの時癇癪を起さないでよかつた——そんなことを口にして微笑した日も

あつたらうと思ひます。

西洋に「一オンスの忍耐は、一ポンドの智恵にまさる」といふ諺がありますが、いづれにせよ、その人その人の工夫によつて、癇癪に耐へて行くことが、實に大切であります。

小事に油斷するな

◇吸殼入りの小箱

大倉喜八郎男が、曾て歐洲視察に行つた時のことでありますが、ロンドンで英國第一の紡績機械工場の持主ブラット氏を訪ね、その應接間に備へつけてあつた上等の紙卷煙草を吸ひながら、大きな取引きをはじめたのであります。

大倉男は、煙草の吸殼を何氣なく庭へ捨てようとすると、ブラット氏は、

「一寸お待ち下さい。それはどうかこの中へお入れ願ひます。」

と、小箱をさしだしました。そして訝かしげな顏をしてゐる大倉男に向つて、

「吸殼をかうして箱に入れて置けば少しも危險はないし、溜つたものを職工たちに與ると、大きなパイプに詰めて喜んで吸ひますから、一舉兩得になります。」

と、説明されました。

『いろは歌留多』に、「油斷大敵、火がぼう〳〵」といふのがあります。火災の原因は、煙草の吸殼の不始末が大部分だと昔から言はれてゐますが、昨年の暮にもそれを裏書きする警視廳の發表がありました。プラット氏が、一本の煙草の生命を最後の最後まで生かしはたらかすと共に(ものゝ生命を無駄にするやうでは、その人も家も決して榮えません……)、それから起る危險を完全に防がうとする用意の何といふ周到なことでせう。

先年、日暮里の玩具工場で、一人の職工が亂暴にマッチを擦つてポンと投つたのが、セルロイドに引火し、忽ち大火事になつて死人まで出したことがありました。マッチを擦るにも、心得がいります。それは擦紙を縦に擦らずに、上の端から順々に横に擦るので、さうすれば、擦紙を縦に擦るよりは何倍かの使用に堪へるので、マッチを本當に活かして使ふことになります。玩具工場の職工が、かういふマッチの使ひ方を知つて取扱ひに細心の注意を拂つたら、あんな慘事は起らなかつた筈で

あります。

まことに、油斷大敵、火がぼう〳〵であります。ある雜誌の漫畫に、「火の用心」の夜廻りをする男が、自分の腰にさげた提灯が燃えだしてゐるのを知らずに、拍子木を叩いて歩いてゐる繪がありました。世上これに類する笑へぬ滑稽は、決して少くはなからうと思ひます。

◇最後の一瞬の緊張

『油斷』といふ文字は、佛經の

中から出たもので、昔、印度のある王様が、何か惡いことをした家來に、油の一杯入つてゐる大きな鉢を高く捧げさせ、もしその中の一滴でもこぼしたら、命を斷つてしまふぞと嚴しく言ひわたし、侍臣に劍を拔いてその男を監視させたといふのであります。

「油」のために命を「斷」たれるといふところから、油斷の熟字ができたのでありますが、世の中には、一滴の油をこぼした爲めに、一生の運命を臺なしにしてしまつたといふやうな場合は、どんなに多いことでせう。例へば、將棋などは、遊び事のなかで、最も鬪爭的であるだけに、盤の上から一瞬たりとも氣を許しては居られません。僅かに「歩」一つのぞんざいな動かし方から飛んでもない局面となり、全軍敗退しなければならぬ原因をつくる場合すらあります。

野球には、特にさういふ例は多いだらうと思ひます。いつの事でしたか、はつきりした記憶はありませんが、明治と立教との、とても白熱した試合で、明治の强打者某君が、本壘打をうつたのであります。某君はカーンと打つた白球が外野の芝生

に入つたとみるや、勇躍、一壘をこえ、二壘三壘をふみ、味方の拍手に迎へられて本壘にかけこんで、ベンチに引きあげようとした時、球審は右手をサッとあげて、「アウト」を宣告したのであります。それは折角の本壘打をうちながら、最後に本壘を踏まなかつたので、立教の捕手から抗議の出た爲めでした。

試合はたしか一點の相違で明治の負けとなつた筈です。あのときの本壘打が物をいつてゐたら、試合はどう逆轉したかも知れなかつたのであります。

わけなく踏める本壘を某君はなぜ踏まなかつたか？　それはアヽよかつたといふ安心が、その頭に閃めいて行つた刹那に緊張は消し飛んでしまつたのか、或は、昂奮にすつかり逆上せあがつて、眼がくらんだ爲めかでありませう。

いづれにせよ、實に恐ろしいことであります。而もかういふ失敗は、決して野球の場合のみでなく、

「あの時の本壘打が物を言つてゐたら……」といふ長く後まで殘る嘆聲は、人生のあらゆる場合によく聞かされるところであります。

◇「二一天作の五」

どんな小さなことにも決して油斷をしないといふ心構へは、ふだんから修練を積んで置かなければなりません。

江戸時代、野田文藏といふ算數の大家がありました。時の將軍吉宗がそれを登用しようとして大岡忠相に試驗をさせました。文藏は召に應じて忠相の役宅に出頭すると、忠相は、

「御身は算術の名人と承はつて尋ねるが……」といつて言葉を改め、

「十を二で割ると、いくつになるか？」

といふ尋ねであります。いかにも人を馬鹿にしたやうにも思はれますが、文藏は、極めて眞面目な態度で、言葉も慇懃に、

「恐れ入りまするが、算盤を拜借仕り度い。」と申出で、渡された算盤を正しく手に持つて、その中央に十の玉を置き、左の端に二の玉を置いて、

「二一天作の五……十を二で割れば五となりまする。」と答へました。

さすがは名人の心掛けであると感服した忠相は、直ちに吉宗に推擧したので、文藏は二百石で召し抱へられることになりました。

問ふ方も問ふ方なれば、答へる方も答へる方だと、つくづく感心させられます。どんな小問題も決してなほざりにせず、どこまでも愼重に、丁寧に、嚴格に取扱ふこの心構へであつてはじめて幾億幾千萬といふ數の込み入つた事柄でも誤ることなく處理されます。一見子供だましのやうなこの就職試驗には、實に限りない味ひがあり、又大きな教訓の潜んでゐることを知らなければなりません。

大事といふも、つまりは小事の積み重なつたものであります。小事を忽せにしない人にして、はじめて大事を完全に成し遂げることが出來るのだといふ例話に、私はよくこの算術問題を持ち出すのであります。しかし、石橋を叩いてわたるやうなこの愼重ぶりも、場合によつては、石橋を馬で一氣に飛ぶやうな早業に變らなければなりません。が、それも畢竟形の上のことであつて、心の中の平靜さはいつも

と同じに、慌てず騒がず、緊張をもちつゞけることが肝腎であります。

◇一本の活字と一粒の豆

出版物の校正については、前にお話したことがある筈ですが、小事をゆるがせにしてならぬ例に、これは最も適切であります。

この『向上の道』一冊は、振假名を別にしても、約十二萬といふ活字が入つてゐます。それを一字々々原稿とてらし合せて、違つた活字を直してゆくのが、校正の仕事であつて、更に再校、三校と幾度も讀み直して行くのですが、讀みながら一寸外の事を考へたりすると、もう違つた活字をそのまゝ看過ごしてしまひますから、分秒の油斷も許されません。

それと共に、筆者の意圖をはつきり摑んで、それを生かして行くだけの、細心な、行屆いた注意もいるのであります。曾て明治文壇の大家だつた饗庭篁村氏の作のなかで、上野の秋の夕方、鐘がコーンと鳴つたといふのを、校正係の人が、鐘だから

ゴーンだらうと、濁點をつけたのであります。これで秋の靜寂な感じが打ち壞されてしまつたと言つて、篁村氏が「校正(後生)畏るべし」と洒落まじりに慨嘆したといふ有名な話が殘つてゐますが、濁點一つで、文豪の作の味ひを生かすか殺すかといふことにさへなるのですから、實に容易ならぬ注意がいるのであります。

校正は外のことに囚はれず、一心不亂にその仕事に溶け込む境地にならなければなりませんが、そ

れには、自分のやつてゐる仕事は、活字一本の間違ひでも、これを出版する社の信用に關する――だから自分の仕事は、社の信用を高めるか壞すかの點にまで響くものであるといふ信念が肝要であります。

更にいま一つ例を擧げませう。

亞米利加のピッツバーグ町にハインツといふ罐詰工場があります。直營の農場の就業員が二十萬人といふ大規模で、罐詰では世界第一と稱されて居ります。

先年某氏がそこへ視察に行きますと、十七八から二十歳ぐらゐの女工が大勢列んで、傍眼もふらず熱心に豆をよりわけて居ります。若い娘さんには、とても根のいる仕事ですから、その中の一人に、

「毎日、かういふ仕事をつゞけてゐては、やり切れないでせうな。」

と慰め顏に言ひますと、その娘さんの答へこそは、世にも感心なものでした。

「あなたは日本のお方ですね。お國へもこの會社の罐詰は行つてゐるでせうが、罐を開けたとき、もし腐つた豆が一粒でも出たら、この會社全體の品は、お國で信

用されなくなります。ですから私たちは、たゞ、一生懸命になつて豆をよりわけてゐます。」

一粒の豆は全工場の信用に關する！　これ以上の立派な信念がありませうか。ハインツの製品が世界に雄飛するのは、この少女たちの纖手の力だと、つよく感得した某氏は、これこそ歸朝第一の土產であるとして語られたのでありますが、私も皆さんにこの話を捧げることは大きな喜びであります。

今日の事は今日爲せよ

◇花の梅澤旅團の話

今日爲すべきことは今日爲せよ——明日に延ばしてはならぬ。

これは、一見何でもないことのやうですが、本當は、強い實行力を有つてゐる人が、終始一貫の緊張をつゞけて始めてできるのであります。處世の要諦、こゝにあると云つてもよいのですが、殊に戰爭の場合など、勝利を占める上の大きな原因になることゝ思ひます。

今事變のわが軍の大勝利のなかに、これを證明する幾多の有り難い物語がありませうが、今日は未だこれを自由に聞くことも語ることも許されません。で、私は日露戰爭の時の一挿話をこゝに記すことゝしますが、世に處する上の大きな敎訓が、

この中にあるのであります。

× ×

奉天大會戰の際、右翼の第一軍に屬し、その先鋒として最前線に陣どつたのが梅澤旅團であります。旅團長は梅澤少將、いつも見事な勝利を博するので、花の梅澤旅團といふ名前で評判されてゐました。

先鋒の譽を擔つてゐるだけに、將兵の士氣大いにあがり、ぐん〳〵進んで行くうちに、いつしか後方との連絡が薄くなつたのであります。すると軍の司令部から、日が暮れかゝつた頃に、

「後方との連絡が緊密を缺いてゐる、かく〳〵の地點までさがれ。」

と云ふ命令が來ました。梅澤旅團長はこれは尤もだと肯かれ、すぐ後退の準備にかゝらうとすると、幕僚の人達は、

「もう時間が遲いので、これから後退することは大へん困難であります。或は軍を混亂させるおそれがあるかも知れませんから、明早朝にしてはいかゞでございませう。」

といふのでした。然るに梅澤旅團長は、この幕僚一致の意見を言下に斥けて、

「わしは命令通り後退を實行する。」

と、斷乎として言ひ切り、更に言葉をつゞけて、

「戰爭には匂ひがある。こちらが斯ういふことを言ひあつてると、敵は必ずそれを嗅ぎつけるものだから、直ぐ實行しなければならぬ。もし躊躇してゐるととんでもないことが起るかも知れない。」

と說明して、早速後退にとりかゝつたのであります。

戰爭には匂ひがある！　果せるかな、翌朝はやく敵が大擧して攻めて來ました。が、日本軍は靜まりかへつて何の音もしないので、これは不思議だと斥候を放つて見たところ、梅澤旅團はもうずつと退つて他の部隊と緊く連絡してゐることがわかり、空しく引き返したのであります。

昔、賤ケ嶽の戰ひに、勝に誇つて敵ちかく前進した佐久間玄蕃は、總大將の柴田勝家から後退せよといふ命令を受けたが、それに服しないで頑張つてゐると、秀吉のために一堪りもなくやッつけられました。然るに、梅澤旅團長は後退を勇敢に斷行し、敵に乘ずる間隙を與へなかつたのは、流石に名將といはれるだけの事があつて、今日なすべきことを明日に延ばしてはならぬ絕好の例話であります。

◇思ひ立つたが吉日

何か事の起つた場合、昂奮などせず、靜かに落ちついてゐると、どうそれに處したらいゝかといふ考へが水のやうな心境にポッカリ浮かんで來るものです。それは

「天」によつて教へられたと言つてもよいのですから、直ぐその通り實行しぐん〳〵押し進めて行かなければなりません。

が、決心をしたものゝ、實行は容易でないからと尻込みし、まア明日の事にしようなどゝ一時をごまかしてゐると、折角の機會は逃げて行つてしまひます。

私の知人が或る事業の資金を某氏から融通してもらはうと思ひ、交渉した時のことです。委細に事業の有望なことを語つて、對手の心を十分動かし得たといふ自信を得ましたが、愈々資金のことに入らうとしたとき、こゝで金の話までするのは、あまり調子に乘り過ぎはせぬか、厚かましいと取られはせぬか、などゝ考へると、急に心におくれが來て、金の事はこの次にゆつくり話さうと、言葉を濁して歸りました。

それから二三日經つて行くと、先方は至極冷淡で、この間の話には觸れまいとする樣子なので、がつかりしてしまつて、そのまゝ引き下つたといふことでした。

早く功を收めようと焦つては勿論いけないのですが、ものには潮時があります。

潮のさしてくる凄まじい勢ひに乘つてこそ事は成就するのですが、右の話のやうに自分から尻込みして、その潮の見る〳〵引いて行くのを指を啣へて傍觀してゐては、潮干狩のとき潮に殘された章魚のやうなみじめさを見なければなりません。

昔から、思ひ立つたが吉日といつてゐます。日の吉凶を氣にするおろかな迷信を利用して、イザやらうと決心した日が一番の大吉だといふのは、妙味津々たるものがありますし、又、思ひ立つた日に實行することが、物を成就させるといふ眞理を含んでも居るのであります。

◇大晦日の晩の加增

井伊直孝は、大阪の役に勇名を轟かした猛將で、家康の信任最も厚く、江州彦根三十萬石の藩主に封ぜられた人であります。ある年の大晦日、夜も晩くなつてから、直孝は突然家老の一人を召して、

「家中の某といふものは見どころがあるから、只今三百石の加增を申しつける。

その方よきに取計らつてくれ。」

といふ藪から棒の命令に家老は驚いて、

「今宵御加増となりましては、只一夜の事にて一年分の祿を遣はすことに相成りますが、お言葉を返して恐れ入りますが、春に遊ばされては如何で御座いませうか。」

と申しあげますと、

「いや、左様でもあらうが、加増と決つた上は一日一夜はおろか、寸刻の猶豫もできぬのだ。」

と言つてから、更に詳しい事情を語り聞かせました。

「實は、先年余の馬の口取りをしてゐた者は、まことに律儀で末の見込みもあるから、侍に取り立てゝやらうとおもつてゐたところ、大阪出陣のみぎり、ふとしたことから、他家の若者と口論し、双傷沙汰に及んだ。先きは士分なので謹慎で事濟みになつたが、こちらは小者だといふので、打首を申しつけなければならなかつた。もし一日早く侍に取りたてゝ置いたら、可惜若者をむざ〳〵殺すことはなかつたらうと、余は唇を嚙んで後悔し、やらうと思ひながらそのまゝ打捨てゝ置いた因循さを自分で鞭打つて責めたのだ。

それからは何事によらず、これは善い事だと思ひついたら、直ぐに實行することに決めて今日に及んでゐる。大晦日の加増といふのもそれがためで、余はどうしても明日まで待てないのだ。」

これを聞いた家老は、何といふ情ぶかいことだらうと、たゞ感激の涙に咽ぶのみでありました。が、それと共に、善事を行ふには寸刻の躊躇を許さないといふ直孝の逞しい實行力を、私たちは取つて

處世上の鑑としなければなりません。

◇石の下の寶もの

こんな話があります。

昔、ドイツ聯邦の或る街の大通りに、何者の仕業か、大きな石を置いてあることが翌朝になつて發見されました。

「こんな物が道の眞中にあつては、町の恥になる。」

通りすがりの人たちは、皆口々にかう言つて、それを取り除けなければならぬと思ふのですが、大勢の中には誰かやつてくれるだらう、自分が手を出すまでもないと躊躇するものばかりで、とう〳〵石はそのまゝ一ヶ月あまり過ぎました。

すると、ある日、王様は人民を集めて演說されました。

「この石は余が置いたのである。誰か取除ける者があつたら褒美をやらうと待ち構へてゐたが、一人も手を出すものがなかつた。この石を動かすとその下から一枚の

書き附けと一つの囊が出てくるのだ。紙には、石を除く者には、この囊を與ふと書いてあり、囊の中には寶石入りの指環と金貨二十枚とが入れてあつた。」

聞いてゐる人たちは、みな驚いて後悔の顏を見合つたのであります。

善事をやらうと思ひついたら、何の躊躇もなく實行した者には、金貨と寶石が與へられるといふのは、ドイツの或る街の話ばかりでなく、「天」は人生のいたるところに、樣々のたからものを藏して、實行力のある人に與らうと待つてゐるのであります。然るに、彼のドイツの話のやうに、寶のあることに氣がつかないばかりに躊躇し尻込みする人のどんなに多いことでせう。人の幸不幸、成功不成功の分岐點はこゝにあると言つてもよいと思ひます。

だから私たちは、平生から、何でも卽時實行する習慣をつけなければなりません。それには、まづ小さな事から改めて行きたいのであります。

たとへば御飯時、お膳に向はうと思ひながら、つひ何かに心牽かれてぐづ〳〵したり、便所へ行きたくても讀みかけの小說が終つてからなどゝ我慢してゐるやうな

ことが、私たちの身邊に非常に多いのであります。

と云ふと、そんな小さなことなど何うでもよいではないかと笑ふ人があるかも知れません。それはいかにも小さいことでせう。が、食事時間の不規律は食慾を減らして健康を害ふ種となるし、小便を我慢してゐると膀胱に惡い影響を及ぼします。否、それどころでなく、さういふ心構へは、やがてその人を優柔不斷の性格につくり上げ、重大事に當つて斷乎として實行する氣力をなくしてしまふのであります。

これは實に恐るべきことではありますまいか。

だから、今日爲すべきことは今日爲せよ。明日に延ばしてはならぬ——この心構へを日常の生活のあらゆる點に及ぼして行くよう、ふかく戒めて實行したいと思ふのであります。

取越し苦勞に囚はれるな

◇揚子江沿岸の泥水

事變の當初は、暑さがはげしいので、兵士たちは水のないのに、ひどく困らされました。

腐れかゝつた敵の死骸が重なりあつて流れてくると、それに鰻が吸ひついてゐる揚子江の泥水を、毛布を二三枚重ねたもので漉して飲むといつた狀景は、上海ばかりでなく、北支でもよく見られたさうですが、それで腹を痛めた兵士はなかつたといふことでした。

この話を聞く人は、よくそんなことができるものだと感嘆しますが、畢竟、水を恐れてゐる餘裕がなかつたからであります。たゞ〳〵渴きを醫することが嬉しくて、

「こんな毛布で漉したゞけで大丈夫だらうか。」とか、「惡い黴菌がうよ〳〵してゐないだらうか。」とか、取越し苦勞をする餘裕がなかつたからであります。

取越し苦勞をしなければ、揚子江の泥水は胃腸を少しも害しない良水となる——この事實は何を語るかといへば、人間は強いものだといふことであります。餘計な取越し苦勞をしなければ、人はこんなに強いといふことです。

が、それは戰場だから出來ることであつて、ふだん、何事もない時には眞似もされるものでないと云ふ人があつたら、私は、萬物の靈長である人間は、至強至剛の肉體と精神をもつてゐることを自覺しなさい——と言つてあげます。

この自覺あつてこそ、人は健康に惠まれもすれば、成功も摑めるのですが、それを忘れると、たちまち取越し苦勞の捕虜となつて、何でもないことを恐れ、やればやれることを躊躇し、結局、失敗者として終らなければなりません。

昔、支那の杞の國に、毎日空を仰いで、

「天は落ちて來ないだらうか。こんなに廣い天が落ちて來たら、どこにも逃げる道

はないぢやないか。」

といつて、食物も咽喉へ通らないほど心配する男がありました。『杞憂』といふ熟語は、杞の國の人の憂ひといふところから出たものであります。

これは極端すぎる例ですが、しかし、來るか來ないか分らないうちに、先き廻りして心配をはじめたり、吉か凶か判然しないのに、凶と決めて苦しんだりすることは、多くの人の間に見られるところであります。

これがために大事なエネルギイを無駄に減らし、二度と歸らない時間をわけなく浪費したりすることは、實に勿體ないことであります。私たちは、取越し苦勞の絆から速かに脱れ出なければなりません。

◇食堂の中毒騷ぎ

ある會社の食堂で、四十人近い社員が晝食をたべ終つて、二三十分ばかり雜談してゐると、その中の一人が突然ひどい吐瀉を始めました。それを見た傍の社員は、

「いま食べたものが惡かつたんだ、僕もやられた。」

と悲鳴をあげて藻掻き始めると、三人五人とつゞいて苦しみだし、とう〳〵全員に及ぼしてひどい騷ぎになりました。

ところが、そのとき食事が濟むや否や、箸をおく間ももどかしさうに、急ぎの社用で外出した社員がありました。夕方になつて歸つて來ましたが、晝食のあとが何ともなかつたといふので、苦しんだ連中はみな啞然としました。

種々調べて見ますと、始めに吐いた社員はその朝から腹具合が惡かつたことや、悲鳴をあげた男はひどい小心者で、吐瀉の樣を見て仰天したのだといふことが分りました。他の社員たちは丁度夏のことで、よく食堂の中毒騷ぎが新聞に出る所から、さてはやられたなと一齊に慌てだしただけで、何も根のないことは、その場を早く出て行つた社員が、中毒騷ぎの仲間入りをしなかつたことで立證されました。

この話一つで、病氣は勝手に製造されるし、又病氣に恐怖をもてば、五十人でも百人でも一遍にその虜になるものだといふことが分りませう。

もと〳〵胃といふものは、一箇の物質であつて、それ自身では何の働きをする力がなく、心の動くまゝに動くのであります。だから食べた物に恐怖をもてば、胃はすつかり消化の力を失つて、吐いたり下したりもするし、その反對に、心に恐怖がなければ、揚子江の泥水を飲んでも何の異狀がないといふことになります。

浮浪者が、魚の尻尾や野菜物の屑などをごみ箱から拾つて食べて何の故障がない樣を見て、下層社會の人間は幸福だと、つく〳〵羨ましがる人があります。羨まし

がる筈です、その人は、衞生的條件に適ふものばかり吟味に吟味して食べて、年中胃の弱いのに惱んでゐるのですから。

私もその一人でありました。十五六年といふ長い間、胃腸を患つてとう〳〵死の宣告同樣の注意まで受けたのですが、今から五年前、食物に恐怖をもつてはならない、喜んで食べれば一切の物が悉く榮養化するといふ眞理を知つてその通り實行すると、完全に健康を取り戻して、同生の歡びに浸ることができました。爾來今日まで一度も病氣をしたことなく、元氣で若い人たちと一緒に働いて居ります。

◇厭な暗示は撥ね返せ

それはひとり胃腸ばかりでなく、肺であれ、心臟であれ、一切の病氣は半ば取越し苦勞の製造でありますが、世間もまた取越し苦勞を起させよう起させようと仕向けて來ます。たとへば、今年は何十年來の寒さで、感冒が大流行だなどゝ新聞がデコ〳〵と書き立てるし（夏になると、今年は何十年來の暑さです……）、彼方此方でも感

冒の話を聞かされ、寒さが怖くなつて警戒しだしますが、この警戒はもう半分感冒にやられたと言つてもいゝのです。その上、更に、

「どうもお顏色がよくないですな。惡い病氣がはやりますからお氣をつけなさい。」

こんなことをいふのが、好意を示すつもりでゐるお節介者に出會ふと、いよ〳〵神經を起し、急に惡寒がし出して寢込んでしまふ人があります。（お互に人の心の底に暗い翳を投げこむやうなお節介は愼まなければなりません。）

また、町を歩いてゐると、角々に『結核豫防デー』などの看板がでゝゐて、今まで氣にしないでゐた肺病が俄かに恐ろしく、道路に吐かれた痰が不氣味になつて來るとか、意外なことから厭な暗示を受ける場合が實に多いのであります。

私たちは、こんな暗示を撥ねかへすだけの心の抵抗力がなければなりません。それには、自分は、暗示を受けて取越し苦勞をするやうな弱いものでないと云ふことを、幾度も幾度も自分に言つて聞かせるのです。人間は本當に强いものであるといふ固い信念さへあれば、黴菌が怖くて逃げまはるやうなことをしなくても濟みま

す。

◇勝つ勝つと思へば勝つ

「某市に住つてゐる百六歳といふ老翁の許へ、六十一二の男がたづねて行つて、長壽の祕訣を敎へて下さいと言ふと、六十になつたばかりの者が、今から長壽はどうの、かうのと無駄なことを聞いて廻るやうでは、とても長生きはできないと言つて極めつけられました。」

これは、井上哲次郎博士から最近ある會で聞かされた話の一節でありますが、無駄なことを考へ、餘計なことを思ひ煩ふなといふ戒めであります。

三百六十五日を一年とし、五十歳は人間の定命で六十一歳は還曆、七十歳は何だとか、樣々のきまりがあるのですが、みな人間が勝手に拵へたものであります。それなのに、又一つ齡をとつた、もうこんなに齡をとつてしまつては駄目だなどゝ齡に囚はれてゐると、まだ〳〵働ける人でも、本當に駄目になつてしまひます。

父も、兄も、五十歳で死んだので、自分も五十歳で死ぬものと決めこんだ人がありました。初めは輕く考へてゐたのが、だん〳〵その齡に近くなると取越し苦勞がはげしく、とう〳〵仕事も何も手につかなくなつたのを、或る人によつて愚かな迷ひであることを敎へられ、そのおかげで無事に笑つて五十歳を迎へることができたさうです。もしあのまゝでゐたら、本當に五十歳で目を瞑つたことでせう。

これと同じやうに、父が心臟で死んだからとか、自分の家には腦溢血の遺

傳があるとか言つて、それにひどい恐怖をもち、やがてその心臓病で或は腦溢血で死んで行つたといふ話はよく聞かされます。が、それを見て、やつぱり遺傳は爭はれないものだと決めてしまつてはなりません。病氣を恐れる心は、病氣を呼ぶものであることを、はつきり知らなければならないのです。

豐臣秀吉の言葉に、「負ける負けると思へば負ける、勝つ勝つと思へば勝つ」といふがあります。秀吉が敵陣に攻め入る時、丹田より迸りでる力ある聲で、勝つ！勝つ！と自分に言つて聞かせたさまが思ひやられませう。戰爭や樣々の仕事ばかりでなく、健康もまさにその通りで、自分は弱いと思ふと弱くなり、強いと思へば強くなるのですから、人間は強いものだといふ信念を、しつかり掴んでゐなければならぬといふのであります。

◇身邊樣々の取越し苦勞

食物を前にしてゐながら、食慾のない病人が氣の毒なやうに、蒲團にくるまつて

ゐて寢られないといふのも、可哀相であります。しかし、食慾のないのは、大抵、こゝろの我儘がさうならしめるやうに、不眠もまた、自分で製造する場合が多いのであります。

二晩や三晩寢られないことは誰しもよくあるものです。それを不眠症にかゝつたのだと決めてしまふと、睡眠劑の厄介にならずにゐられませんが、これは取越し苦勞にやられたのだと悟り、寢られなかつたら寢ずにゐるだけだ、人間は五日や十日寢なくても死ぬやうな弱いものでないから――。こんな調子で暢氣に構へて本でも讀んでゐると、自然に快よい眠りに入つて行かれます。寢られないことが大變だと心配してゐるうちは、どんなにしても駄目であります。

一日を勤勞、休息（遊び）、睡眠の三つに等分し、睡眠は一日八時間とらなければならぬと昔から言つてゐますが、これは誰が決めたのでせう。こんな詰らないことを決めてあるので、心配性の人は、いつもより寢不足なときは、きつと體に障るものと思ひ込んでしまふので、病氣を恐れる心は病氣を呼ぶと前に言つた通り、たち

まち頭が痛くなつたり體がだらけて來たりします。これは取越し苦勞が、さうさせるのだと悟り、人間は睡眠時間の不足でへこたれるやうなものでないといふ信念を摑みさへすれば、一遍にそんな惱みは突き破れます。戰地で奮闘される人たちが、毎晩々々の不規律な睡眠で何の故障もないのは、そんなことを苦に病む餘裕がないからであります。

小さなことですが、自動車や電車に乘るときつと吐く人があります。これも、乘物に弱いと決めてしまふからで、二度や三度吐いても何とも思はず、平氣でゐれば癖にならずに癒つてしまふものであります。

又、牛乳を飲むと下痢をしたり、何かの魚をたべて腹痛を起したりすると、これは自分の性に合はないと決めてしまふ人がありますが、食物が性に合ふとか合はぬとか、そんなことは絶對にありません。何かの具合で下痢の起きさうなときに牛乳をのんで、それで牛乳は下痢を起こすと思ひ込んだだけでせうから、一寸氣持をかへて平氣になれば、何の障りもなくなつてしまひます。

かういふやうなことは、大抵の人の身邊に群がり起つてゐます。それは取越し苦勞は千手觀音のやうにいろ〳〵の手を出していろ〳〵の事をやりだすからですが、その中で特に恐ろしいことは育兒の上であります。

親の取越し苦勞は、その愛兒を弱くせずには措かないので、やれ風を引かぬか、食あたりをせぬか、運動がすぎはせぬか、危ないことをしないかと、注意の範圍を超えて取越し苦勞をやらうものなら、物を怖ぢ恐れる親の心はそのまゝ子供に映つて、絶えずビク〳〵する神經質の弱い子供にさせてしまひます。田舍の里親に預けて野育ちにした子供は、家に置いて可愛がりぬいてゐる子供とは比較にならぬほど伸々と育つて、元氣で丈夫である事實が、これを證據立てゝゐます。

自分に對する信念がなく、物を恐れ憚るあまりに取越し苦勞となるのですから、その副産物は當然、迷信でなければなりません。やれ運勢はどうだ、やれ方角はどうだ、日がよいか凶いか、合性がどうかと樣々のものに迷はされて、この涯もなく廣い世の中を、自分から小さく切り刻んで、その中に窮屈な暮しをしてゐます。私

はかういふ氣の毒な人のために、他日稿を改めて書くことにして、こゝには、迷信者に三斗の冷水を浴びせかける德川家康の言葉を記します。

家康が石田方の聯合軍と會戰する時、家康の運勢は西が塞がつてゐるから、此處に留まつて敵を迎へ擊つがよいと進言する者がありました。家康はそれを聞くや、

「余の運勢は西が塞がつてゐるなら、進んでそれを突き破るまでだ。」

と言つて、馬を西へ急がせました。

取越し苦勞の亡靈もこれでは退散する外ありません。私たちもこの意氣で、餘計なことに囚はれず、おの〳〵の仕事に邁進するとき、はじめて朗かな生活が樂しめるのであります。

上下、己れを捧げて働く

◇機械力よりは人間力

東京の上野に近い田端驛に、可なり前のことですが、福富といふ驛長がゐました。今でもその方面の人達の話題にされる程立派な心掛けの人で、一日に百五十以上もあつた大變な事故を、たゞの一度も起らなくしてしまつたといふのであります。

これは尋常の話でない、きつと敎へられるものがあるに相違ないと考へた私は、たま〳〵用事があつて同驛近くにいつた時、立ちよつて驛の內外の模樣を見ると、第一に目についたのは、驛員たちの擧動が沈着で、その癖誰一人ぼんやりしてゐる者がなく、お互に助け合はうとする兄弟のやうな親しさが溢れた光景でありました。

成程と思つて感心してゐると、その時、汽車が入つて來て、箱から一人の小さい

子供が下りようとしました、いかにも危なッかしく見えた瞬間、つと走り寄つて、いきなりその子供を大事さうに抱きおろした高級驛員がありました。今でもその印象は深く私の眼に刻みつけられて居りますが、それが驛長福富氏でありました。

福富氏がはじめ田端驛に來られた頃、ハンプといふ荷車分解法が設けられてあつて、能率の上る代りに、故障が續出して危險が非常に多かつたのです。福富氏は、それを深く考へた末、

「器械力をたよりすぎたところに原因があるのだから、人力の限りを盡すより仕方がない。」といふ決心をしたのでありました。

◇一切が自分の仕事だ

元來人は、何かの機會に大きな刺戟に逢はぬ限り、「物を出し惜む」といふ惡い癖が除かれないのであります。金を出し惜むことは勿論ですが、勞力を出し惜むことも人間通有の病であり、それによつて自ら害ひ、損じ、失ふことが實に多いのであります。私達は、働くことの歡びを深く感じ、自己を捧げて力のありたけを出さねばなりませんが、共同の仕事に携はつてゐる人たちに言ひたいことは、「たゞ働け！」ではなく、

「力を出しあつて、助け合へ！」であります。一人が全力を出すのではなくみなが出しあつて皆のために働き合ふのであります。

これを實行するには、社長、店主、又は何々長といふ立場の人が衆に先んじて、同心協力の實を示さなければなりません。福富氏はまさにその人でありました。自分の一身を驛全體に捧げる覺悟で、すべての仕事を驛員と共にやつたのであります。一人で重い物を持ち扱つてゐると、走つて行つて手を貸してやる。車を二人で運んで行くのを見ると、飛びついてどん〳〵押してやる。こんな調子ですから、私の見た子供を抱きおろす親切と敏捷さなどは、當り前なことだつたでせう。

驛長のこの己れを捧げきつた態度は、驛全體の係員の行動に大きな變化を及ぼさずにゐませんでした。それまで二人でやつてゐた仕事は、三人或は四人で手早く片づけられ、五人でやつた仕事は、七人もしくは八人で氣持ちよく運ばれるといふ風になつて行つて、驛内で誰一人力を出し惜しむものなく、而も各員が、人の仕事を手傳つても、「盡くしてやつた」とか、「助けてやつた」とか、そんな水くさい、他人行儀な考へは微塵もなく、皆が自分々々の仕事として、朗かにやつてのけるのであります。これでは、さしも難物のハンプも、全然事故が出なくなつたといふに不

思議はありますまい。

當時の鐵道界の人たちは、「あの事故が除れたとすれば、それは奇蹟だ」と言つたさうですが、人間の心のつかひ方、力の込め方一つで、どんな事でも實現のできることが、證據立てられたのであります。

驛員の仕事をする時は、驛員になりきり、工夫の仕事をする時は、工夫になりきつたところに、この驛長の自己を空しくして、自己を捧げた尊さがあります。畢竟するに、統率者一人のまことによつて、全部がまことになつたのであることを知らなければなりません。

私の社なども、仕事の割に社員の數が少ないのですが、それで仕事がいつも支障なく運轉されて行くのは、やはり社員同志が互に助けあふ結果であることだと思つて、感謝して居ります。編輯の人でも手が空いて居れば、事務の方を手傳ふし、事務の人でも編輯の仕事で飛び廻ることが少くなく、大きな發送などの時は、社員總出でやるといつた風であります。

私も社長室で、皮張りの大きな安樂椅子にふか〳〵と腰でもおろして、煙草をくゆらしながら、窓外の風景を眺めるといつた呑氣な眞似などしたことはなく、編輯、校正、廣告、事務、何でも御座れと一日ぢゆう手をあかすことなく働いて居ります。

たゞこの話を聞いて、驛長が驛員の仕事をしたり、社長が社員の仕事までするのは、過ぎたるは及ばざるが如しで、却つてよくない結果を招きはせぬかと云ふ疑ひをもつ人があつたら、それは全く杞憂にすぎないことを一言して置きます。

◇月給に使はれるな

以上、主として上に立つ人の心構へについて述べましたが、この己れを捧げ、己れを空しくする態度は、使はれる立場にある人、卽ち會社、商店、銀行、官廳、その他に職業を有つ人たちにおいて、いよ〳〵大切なのであります。

自分の命ぜられてゐるだけの仕事をすれば、それでつとめは濟むには違ひないやうなものゝ、それに甘んずる人は、決して大きくはならないのです。仕事をすることが、直ちにその會社なり、商店なりの全部の生命にかゝはるといふ意氣込みでかからなければなりません。日本の兵士が、敵に向つて彈丸を發つとき、この彈一つに日本の運命がかゝつてゐるといふ强い信念があればこそ戰ひに勝てると同じ道理で、社員や店員が自分の仕事は社や店の一部分ではあるが、その一部分が全體を動かすのだと思つて働くとき、その働きにいのちが吹き込まれ、その社なり店なりの發展を助けるやうな卓れた考へもおのづと出るものであります。

かういふ人こそ衆に擢んでゝ用ゐられ、その前途は輝くのですが、もしその反對に單に月給の手前働くといふやうな考へより持たない人の運命は、まことに哀れなものであります。

先日、三十年前に懇意だつた友人と會ひ、食事をしながら、その尊い經驗談を聞かされましたが、それは以上の話を裏書きするものでありました。

その男は商業學校を出て、ある商店につとめて居りましたところ、その頃の金で